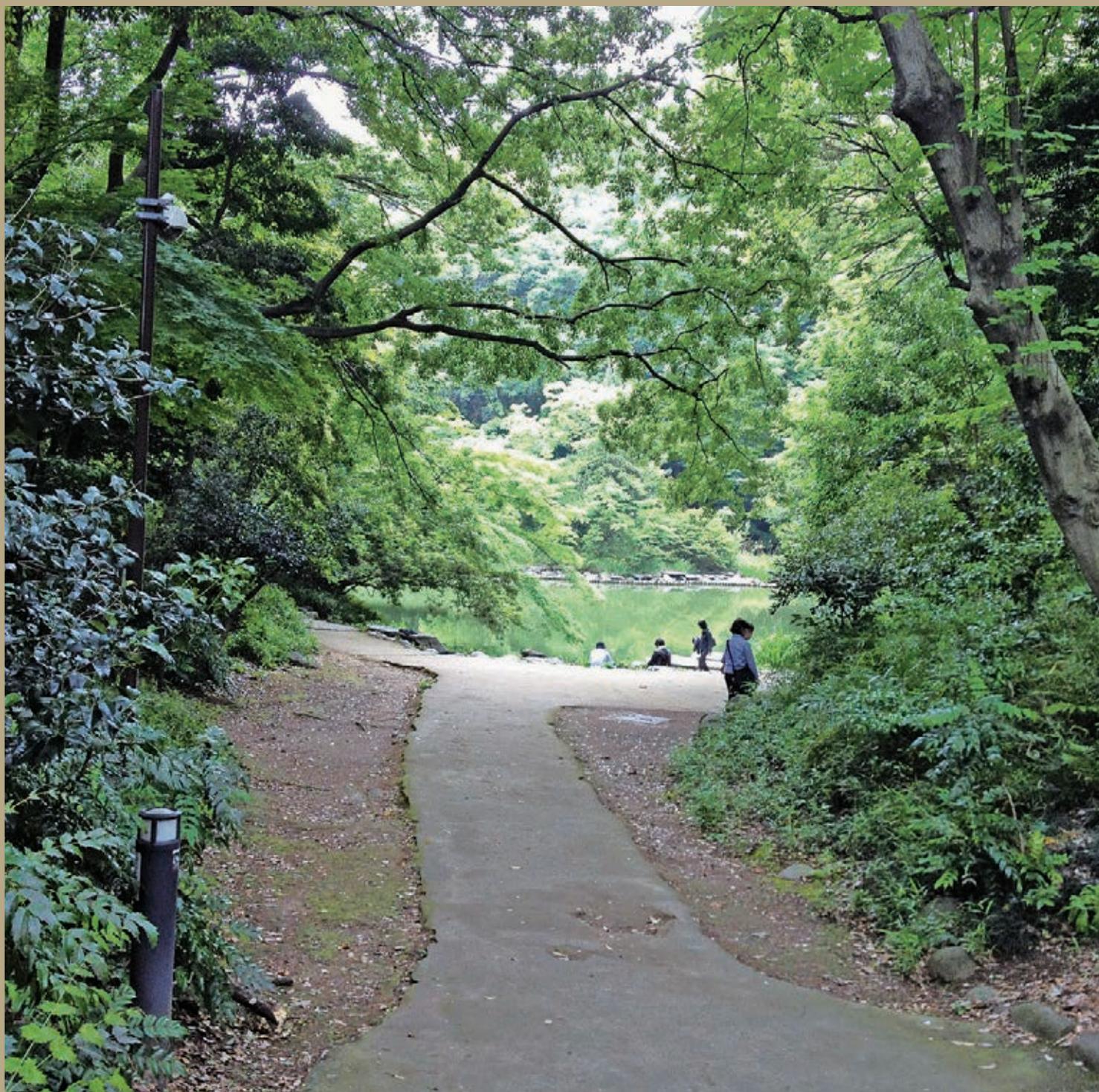


学内広報

2018.1.19

no.1505



特別号

2016年度大学教育の達成度調査

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第9回目にあたり、2017年3月に2016年度の卒業生3,140名を対象として実施し、2,370名から回答をいただき、回収率は75.5%であった。調査の実施には各学部にも多大な協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善にさまざまな形で活用している。先にも述べたように、本調査は、本年度で9回を数えた。新たにたずねる調査項目や状況に合わない項目などが増えてきた。このため、総長補佐3名の方と大学総合教育研究センターでワーキンググループを設置し、そこで大幅なリニューアルを行った。関係者のみなさまのご尽力に改めて感謝したい。また、過去9回の調査で回答の傾向が変化している質問項目について、その推移を検証した。今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は9回目の試みであり、回収率は前回よりやや低下している。また、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関して、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生みなさんの調査へのご協力をお願いしたい。

2017年12月

大学総合教育研究センター長
須藤 修

調査実施方法

- アンケート配布日 : 2017年3月24日(卒業式)
- 2017年3月卒業生数 : 3,140名
- 有効回収数 : 2,370票
- 回収率 : 75.5%(回収率は、有効回収数 / 卒業生数 で計算した)

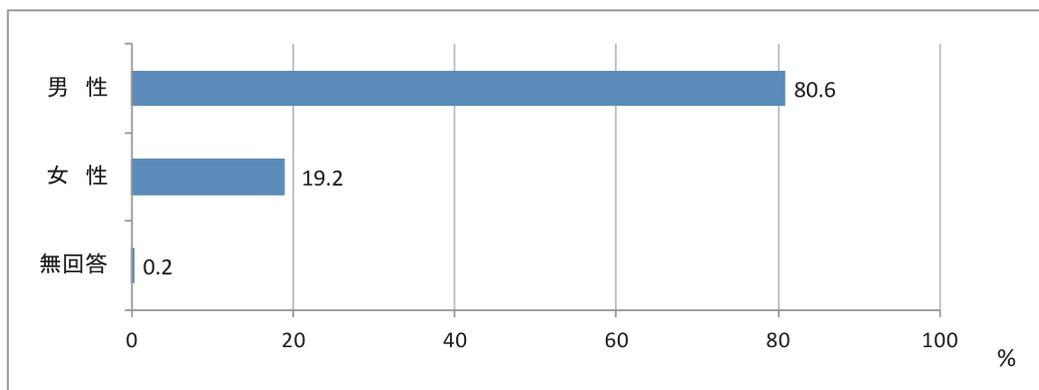
※学部(各学科)が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布、回収した。

※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して100%にならない場合がある。

回答者の特性

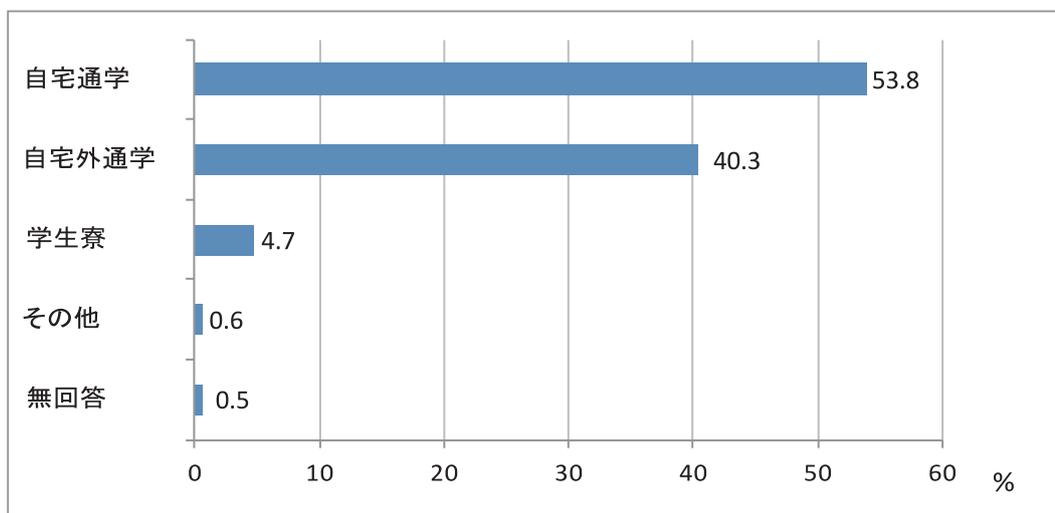
Q 5 性別

回答者は男性が8割（80.6%）、女性が2割（19.2%）、無回答0.2%となっている。



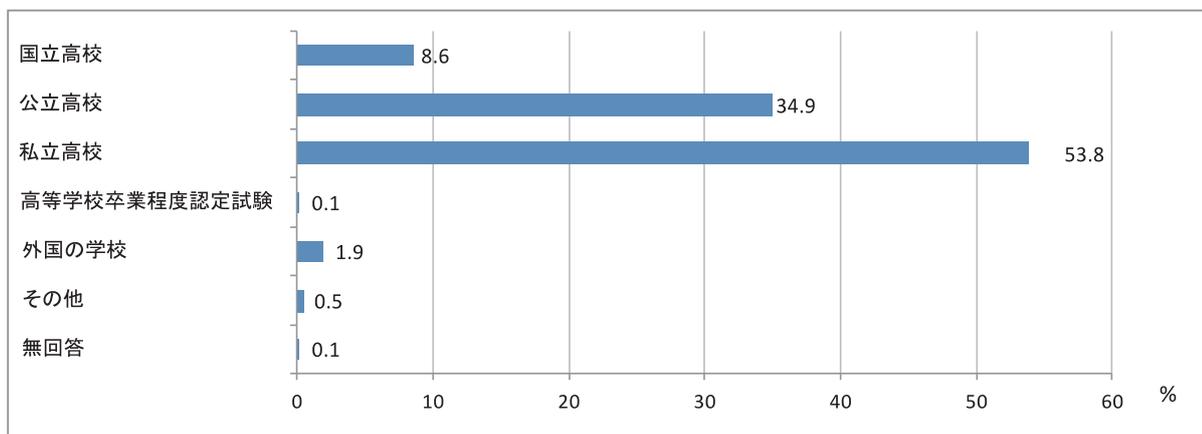
Q 6 通学

回答者のうち、自宅通学はおよそ半数の53.8%、自宅外通学は40.3%で、学生寮は4.7%と少ない。



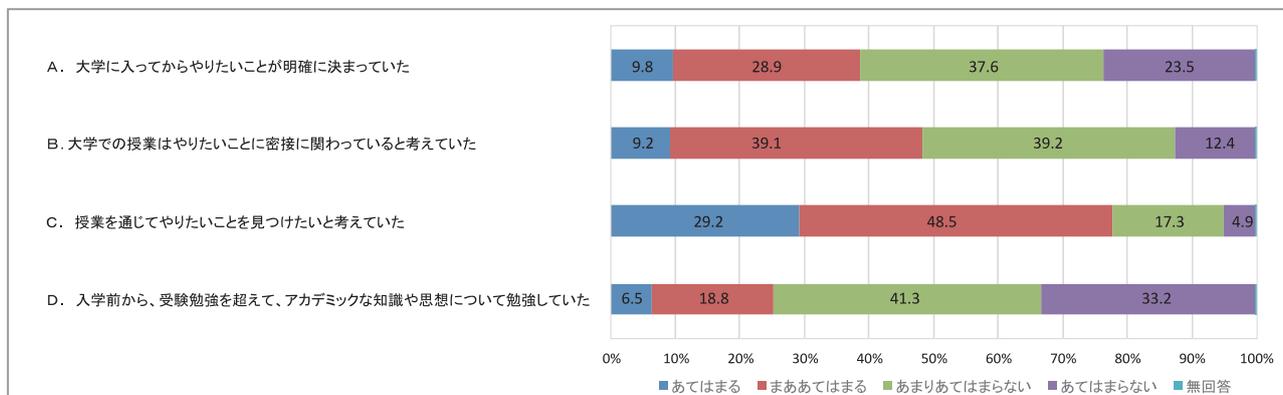
Q 7 出身高校等

回答者のうち、過半数（53.8%）は私立高校出身で、次いで公立高校が約3分の1（34.9%）、国立高校が1割弱（8.6%）となっている。また、外国の学校は1.9%となっている。



入学時：「やりたいことが明確」は4割弱、「授業を通じて見つけたい」は8割弱、「入学前からアカデミックな知識や思想について勉強していた」は4分の1

Q 8 入学時の様子についてお聞きます。次のことは、どの程度あてはまりますか。



「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」9.8%と「まああてはまる」28.9%を合わせて38.7%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」者（48.3%）はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つげたいと考えていた」者が8割弱（77.7%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴である Late Specialization に沿った学習志向性を持っていた。一方、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者（25.3%）は、4分の1程度である。

「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%であった。その後はやや減少傾向にあったが、2016年度は38.7%となり、2015年度の34.1%を上回っている（時系列の傾向については25頁以下を参照）。同じように、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」6.3%、「まああてはまる」19.4%で合わせて25.7%であった。それ以降やや減少傾向にあったが、2016年度の割合（25.3%）は2015年度（22.2%）を上回っている。こうした時系列の変化については、後に詳細に検討する。その他の項目について、こうした時系列の変化に傾向性がない。以下では、とくに目立った傾向がないものについては、特に記載しない。

大学時代を通じての経験

前期課程・後期課程を問わず、「趣味やスポーツなどが充実した」、「議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」、「一つのことについて没頭して取り組んだことがある」、「研究室やサークルなどのOB、OGと知り合いになれた」のあてはまる割合は6割以上

「自分の専門以外の本をよく読んだ」のあてはまる割合は前期課程が大きい。「アカデミックな雰囲気の中に自分を置いた」、「自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた」、「専門書や学術雑誌をよく読んだ」について、後期課程のあてはまる割合が大きい

Q9 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。前期課程と後期課程について、それぞれお答えください。

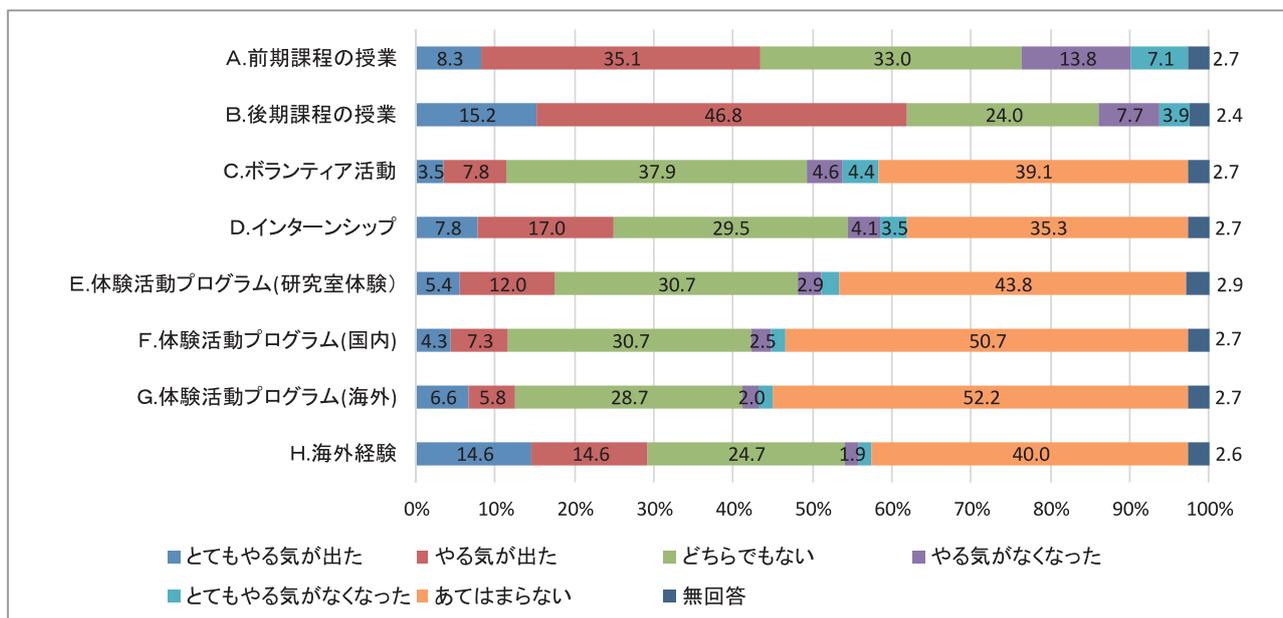
	前期課程 (%)			後期課程 (%)		
	あてはまる	まああてはまる	合計	あてはまる	まああてはまる	合計
A. アカデミックな雰囲気の中に自分を置いた	8.2	23.4	31.6	21.3	46.6	67.9
B. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた	8.2	19.7	27.9	15.1	33.4	48.5
C. 一つのことについて没頭して取り組んだことがある	37.5	32.3	69.8	44.5	35.8	80.3
D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた	26.8	39.7	66.5	39.6	39.6	79.2
E. 優れた友人に感化された	38.3	36.8	65.9	49.3	34.0	83.3
F. 研究室やサークルなどのOB、OGと知り合いになれた	39.1	26.8	65.9	44.7	30.5	75.2
G. 自分の専門以外の本をよく読んだ	18.3	32.5	50.8	15.9	27.5	43.4
H. 専門書や学術雑誌をよく読んだ	7.3	18.2	25.5	19.2	37.4	56.6
I. 趣味やスポーツなどが充実した	45.8	33.7	79.5	36.6	33.4	70.0
J. 勉強したい専門がなかった	8.9	28.0	36.9	4.7	17.3	22.0
K. 前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につかなかった	12.2	33.4	45.6			
L. 後期課程では授業についていくのに苦労した				9.7	29.7	39.4
M. 就職活動に時間をさきすぎた				3.0	8.1	11.1

2016年度より、上の表に示す各項目について、前期課程と後期課程ではそれぞれの程度あてはまるかを回答者にたずねた。「あてはまる」と「まああてはまる」割合の合計をみると、前期課程では、「I. 趣味やスポーツなどが充実した」(79.5%)、「D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」(66.5%)、「C. 一つのことについて没頭して取り組んだことがある」(69.8%)のあてはまる割合が最も高く、7割前後であるのに対して、「H. 専門書や学術雑誌をよく読んだ」(25.5%)と「B. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた」(27.9%)のあてはまる割合は3割未満である。一方、後期課程での各項目の「あてはまる」と「まああてはまる」の割合を合わせると、「E. 優れた友人に感化された」(83.3%)、「D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」(79.2%)、「C. 一つのことについて没頭して取り組んだことがある」(80.3%)の割合は8割前後と大きく、「M. 就職活動に時間をさきすぎた」(11.1%)と「J. 勉強したい専門がなかった」(2.0%)の割合が低いことがわかる。

前期課程と後期課程の共通した項目のあてはまる割合を比べると、「C. 一つのことについて没頭して取り組んだことがある」、「D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」、「E. 優れた友人に感化された」、「F. 研究室やサークルなどのOB、OGと知り合いになれた」、「I. 趣味やスポーツなどが充実した」は前期・後期を問わず、6割以上と大きい。しかし、前期課程と後期課程のあてはまる割合が明確に異なる項目も見られる。「G. 自分の専門以外の本をよく読んだ」は前期課程のあてはまる割合が大きい。「A. アカデミックな雰囲気の中に自分を置いた」(前期課程31.6%、後期課程67.9%)、「B. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた」(前期課程27.9%、後期課程48.5%)、「H. 専門書や学術雑誌をよく読んだ」(前期課程25.5%、後期課程56.6%)について、後期課程のあてはまる割合が前期課程を大きく上回っている。概ね、後期課程での経験がより高く評価されている。

勉強のやる気が出たきっかけ：「前期課程の授業」約4割半、「後期課程の授業」約6割、「海外経験」約3割、「インターンシップ」2割半

Q10 大学生活のなかでなにかがきっかけになって、勉強のやる気が出たり、なくなったことがありますか。



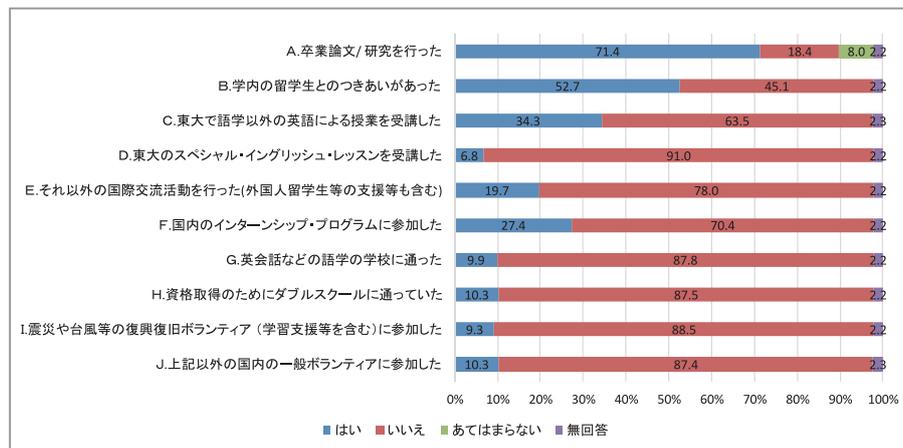
大学生活のなかで勉強のやる気が出たり、なくなったことのきっかけについて、2015年度の4項目から今年度は8項目に増やしてたずねた。「A. 前期課程の授業」でやる気が出た割合は43.4%（「とてもやる気が出た」8.3%、「やる気が出た」35.1%）に対して、「B. 後期課程の授業」でやる気が出た割合は62.0%（「とてもやる気が出た」15.2%、「やる気が出た」46.8%）である。「C. ボランティア活動」、「D. インターンシップ」、「E. 体験活動プログラム（研究室体験）」と「H. 海外経験」について、「あてはまらない」割合が4割前後あるなか、「H. 海外経験」がきっかけでやる気が出た割合が29.2%（「とてもやる気が出た」14.6%、「やる気が出た」14.6%）で最も高く、次に高いのは「D. インターンシップ」の24.8%である。「F. 体験活動プログラム（国内）」と「G. 体験活動プログラム（海外）」の「あてはまらない」割合は50%以上あり、二者がきっかけでやる気が出た割合はそれぞれ11.6%、12.4%である。

各種体験活動の参加率はそれほど高くない。経験者のやる気への影響に関しても「どちらでもない」の割合が比較的大きい。また、こうした体験活動がきっかけでやる気をなくした人の割合はいずれも10%未満で、「C. ボランティア活動」、「D. インターンシップ」の比率が若干高い。

在学時の学習機会・経験

「卒業論文 / 研究を行った」比率は約 7 割、「学内の留学生とのつきあいがあった」約 5 割、「東大で語学以外の英語による授業を受講した」3 割半、大学の外で学習機会を得る比率と諸活動の体験率が低い

Q11 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

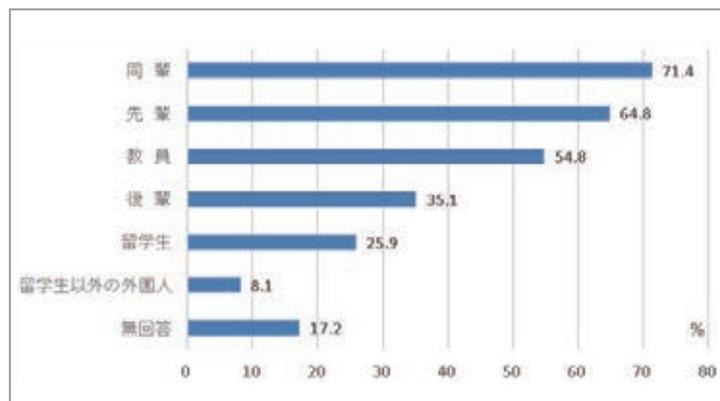


国内の在学時の学習機会・経験について、「A. 卒業論文 / 研究を行った」を経験した比率が 71.4% と最も高く、「B. 学内の留学生とのつきあいがあった」52.7%、「C. 東大で語学以外の英語による授業を受講した」34.3%、「F. 国内のインターンシップ・プログラムに参加した」27.4%、「E. それ以外の国際交流活動を行った(外国人留学生等の支援等も含む)」19.7% の順で体験率が低くなる。「H. 資格取得のためにダブルスクールに通っていた」(10.3%)、「G. 英会話などの語学の学校に通った」(9.9%)、「I. 震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等を含む)に参加した」(9.3%) の体験率は 10% 前後にとどまり、「D. 東大のスペシャル・イングリッシュ・レッスンを受講した」者は 6.8% しかいない。

全体として、大学の取り組みと関係のないところで学習機会を得る比率や諸活動の体験率が低い。

「教員とのアカデミックな交流」5 割半、「同輩」約 7 割、「先輩」6 割半、「後輩」3 割半、「留学生と留学生以外の外国人」3 割半

Q12 あなたは授業外で、本学のつぎのような人とアカデミックな交流がありましたか。(複数回答)



教員などとの学問的な交流について、質問文は 2015 年度までの「あなたは、つぎのような人と学問的な交流がありましたか」から、「あなたは授業外で、本学のつぎのような人とアカデミックな交流がありましたか」に変更し、授業外でのアカデミックな交流の有無をたずねた。結果的に、最もアカデミックな交流があったのは「同輩」で、約 7 割(71.4%)、次いで「先輩」64.8%、「教員」54.8% となっ

ており、「後輩」は半数以下(35.1%)、「留学生」(25.9%) と「留学生以外の外国人」(8.1%) を合わせると 34.0% となる。なお、この質問の今年度の無回答率(17.2%) は 2015 年度(9.1%) より 8.1% 高い。授業外でのアカデミックな交流に絞ったことと無回答率の違いがあるため、これまでの調査結果と比較するには留意が必要である。

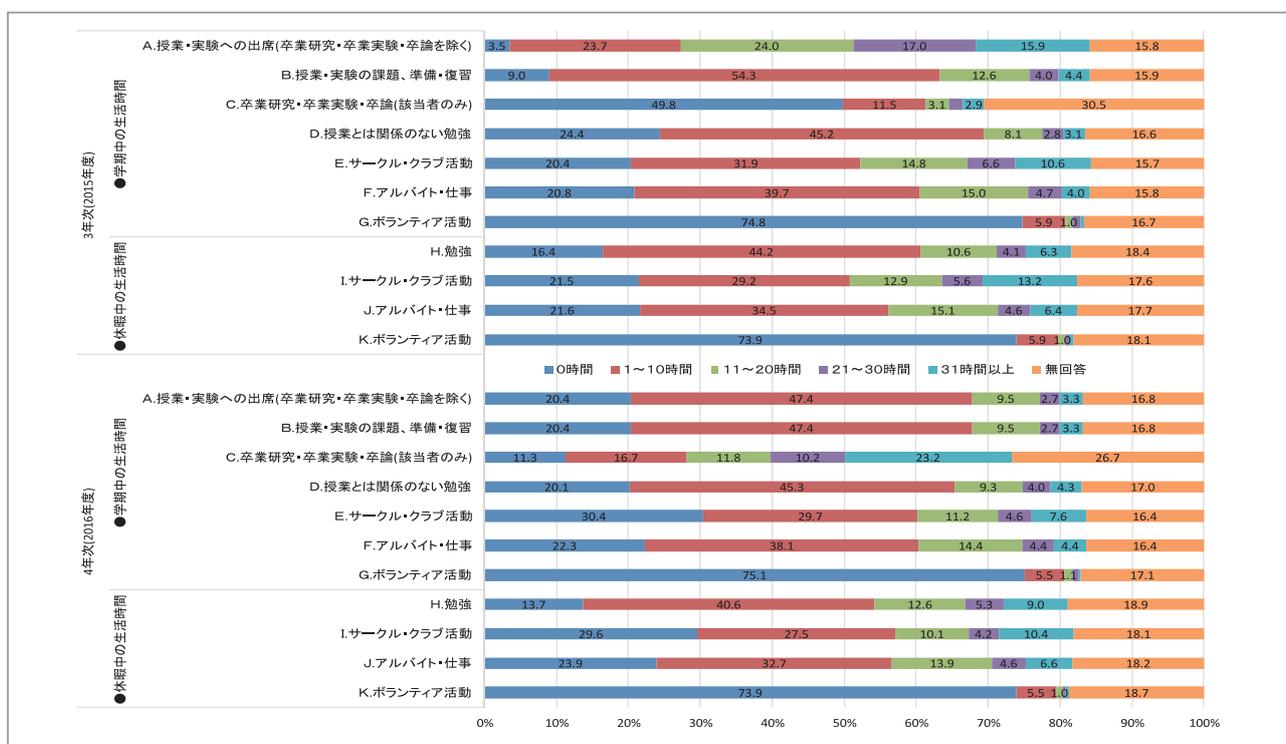
生活時間 4年制課程

3年次学期中：「授業・実験の課題、準備・復習」は週に「10時間以下」が6割強

4年次学期中：「授業・実験の課題、準備・復習」は週に「10時間以下」が7割弱、「卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」は週に「31時間以上」が4分の1

休暇中の「勉強」は3年次、4年次を問わず、週に「1～10時間」が4割強。「ボランティア活動」について、年次を問わず、学期中か休暇中を問わず、「0時間」が約7割半

Q13 典型的な1週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、2015年度と2016年度にそれぞれ活動へ何時間あててきたか、およその時間数に該当する数字を1つ選んで、それぞれの欄に記入してください。



生活時間については、典型的な1週間（土、日を含む）の時間数を学期中と休暇中について、それぞれ3年次と4年次の状況をたずねた。

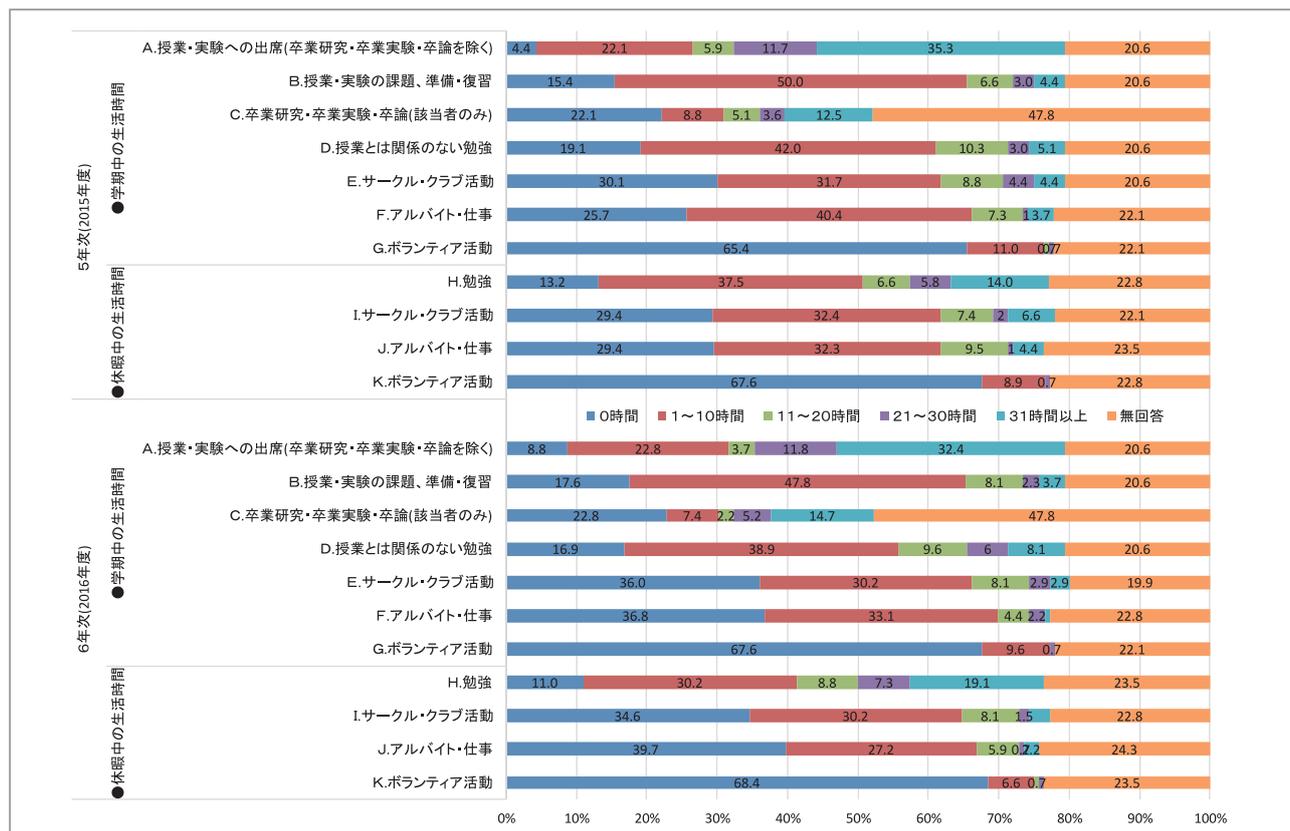
学期中の生活時間をみると、3年次には「B. 授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が6割強（63.3%）、4年次では7割弱（67.8%）となっている。「C. 卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」は4年次では「31時間以上」が23.2%で、最も高い割合を占めている。また、「D. 授業とは関係のない勉強」について、「0時間」は3年次では24.4%、4年次でも20.1%となっており、どの年次の割合も2015年度よりやや低い。休暇中の生活時間をみると、3年次、4年次を問わず、「H. 勉強」は「1～10時間」が40%余りと最も比率が高く、「11～30時間」が15%前後、「31時間以上」が10%未満となる。さらに3年次、4年次を問わず、「I. サークル・クラブ活動」は「1～10時間」3割弱、「J. アルバイト・仕事」は「1～10時間」3割強で、それぞれのカテゴリのなかで大きい割合を占める。

「K. ボランティア活動」について、年次を問わず、学期中か休暇中を問わず、「0時間」の割合が約7割半と高い。

生活時間 6年制課程

5年次・6年次を問わず、学期中の「授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が6割半休暇中の「勉強」は週に「1～10時間」が3割以上。「ボランティア活動」について、学期中か休暇中を問わず、「0時間」が約6割半

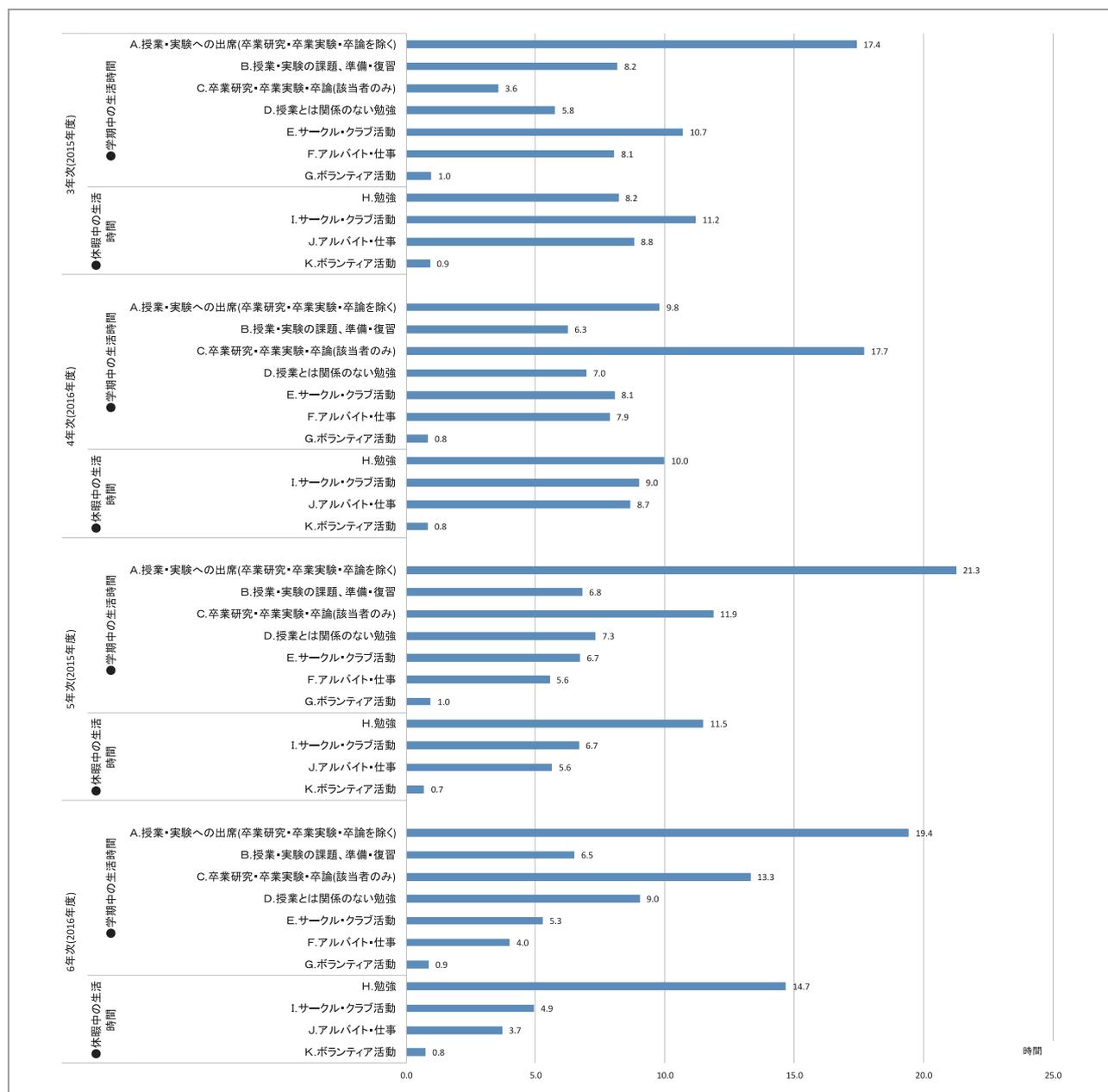
Q13 典型的な1週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、2015年度と2016年度にそれぞれ活動へ何時間あててきたか、およその時間数に該当する数字を1つ選んで、それぞれの欄に記入してください。



6年制課程（医学科、獣医学課程、薬学科）については、5、6年次についてのみたずねた。学期中の時間をみると、5年次には「B. 授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が6割半（65.4%）だが、「A. 授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」の「31時間以上」も35.3%と、3分の1以上になっている。また、「D. 授業とは関係のない勉強」が「0時間」は19.1%となっている。6年次では、「B. 授業・実験の課題、準備・復習」も「10時間以下」が65.4%となっているが、「A. 授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」の「31時間以上」は32.4%と、約3分の1になっている。6年次では、「C. 卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」は「31時間以上」が14.7%となり、「0時間」が22.8%と、「無回答」を除けば最も高い割合を占めている。また「D. 授業とは関係のない勉強」も「0時間」が16.9%となっている。

休暇中の生活時間をみると、5年次、6年次を問わず、「H. 勉強」は「1～10時間」が3割以上で最も比率が高く、「11～30時間」と「31時間以上」はそれぞれ15%前後となる。さらに5年次、6年次を問わず、「I. サークル・クラブ活動」は「1～10時間」が3割、「J. アルバイト・仕事」は「1～10時間」が3割前後である。「K. ボランティア活動」について、年次を問わず、学期中か休暇中を問わず、「0時間」の割合が6割半以上と高い。

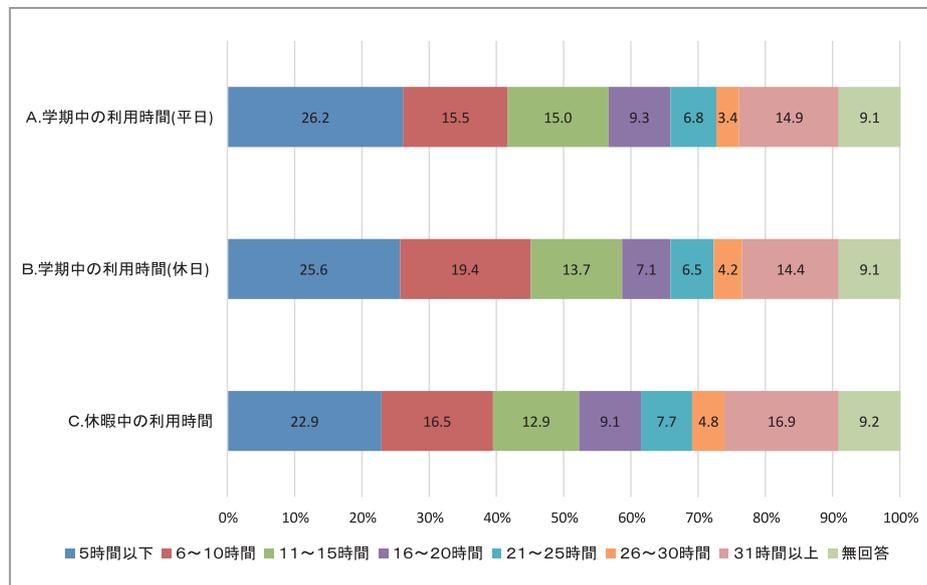
3年次 : 「授業」 17 時間、「予習復習」 8 時間、「卒研卒論」 4 時間、「授業外の学習」 6 時間
 4年次 : 「授業」 10 時間、「予習復習」 6 時間、「卒研卒論」 18 時間、「授業外の学習」 7 時間
 5年次 : 「授業」 21 時間、「予習復習」 7 時間、「卒研卒論」 12 時間、「授業外の学習」 7 時間
 6年次 : 「授業」 19 時間、「予習復習」 6 時間、「卒研卒論」 13 時間、「授業外の学習」 9 時間



生活時間の回答のそれぞれの中位値(たとえば、「1～5時間」で3時間)を取り、平均を算出した。なお、「31時間以上」は33時間として算出した。学期中の時間数の平均で見ると、「A. 授業・実験への出席(卒業研究・卒業実験・卒論を除く)」は、3年次で17.4時間、4年次には9.8時間となっている。「B. 授業・実験の課題、準備・復習」は、3年次で8.2時間、4年次には6.3時間となっている。「C. 卒業研究・卒業実験・卒論(該当者のみ)」は、3年次で3.6時間、4年次には17.7時間となっている。また、「D. 授業とは関係のない勉強」については、3年次で5.8時間、4年次で7.0時間となっている。いずれの年次も少し減少している。単純に合計すると、勉強時間は、3年次で35.0時間、4年次で40.8時間となっている。6年制の5年次と6年次も、4年制の3年次と4年次と同じような傾向がみられるが、いずれもやや時間が長くなっている。

インターネットの利用時間は、学期中・休暇中とも「5時間以下」が約4分の1、「26時間以上」が約2割、平均は14～15時間

Q13-SQ 上記の1週間のなかで、PC、タブレット、スマートフォンなど、すべて合わせてインターネット（ウェブ検索、SNSなど）を利用した時間はどのくらいですか。

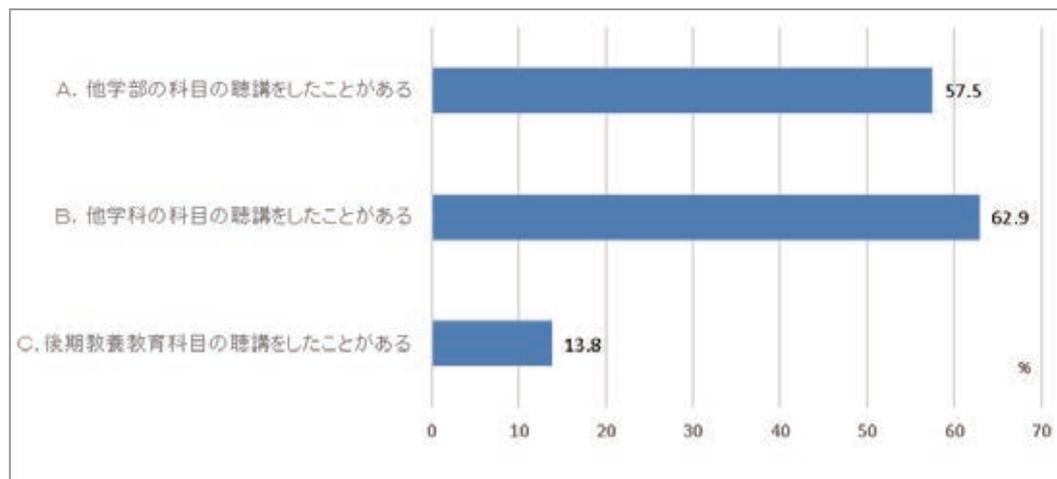


2015年度からインターネットの利用時間をたずねている。学期中と休暇中では大きな差はないが、休暇中では週に「21時間以上」の長時間利用がやや多い。「5時間以下」は学期中(平日)が26.2%、学期中(休日)が25.6%、休暇中が22.9%であるのに対して、「26時間以上」は学期中(平日)が18.3%、学期中(休日)が18.6%、休暇中が

21.7%となっている。平均時間を算出すると、学期中(平日)が14.3時間、学期中(休日)が14.0時間、休暇中が15.4時間となっている。

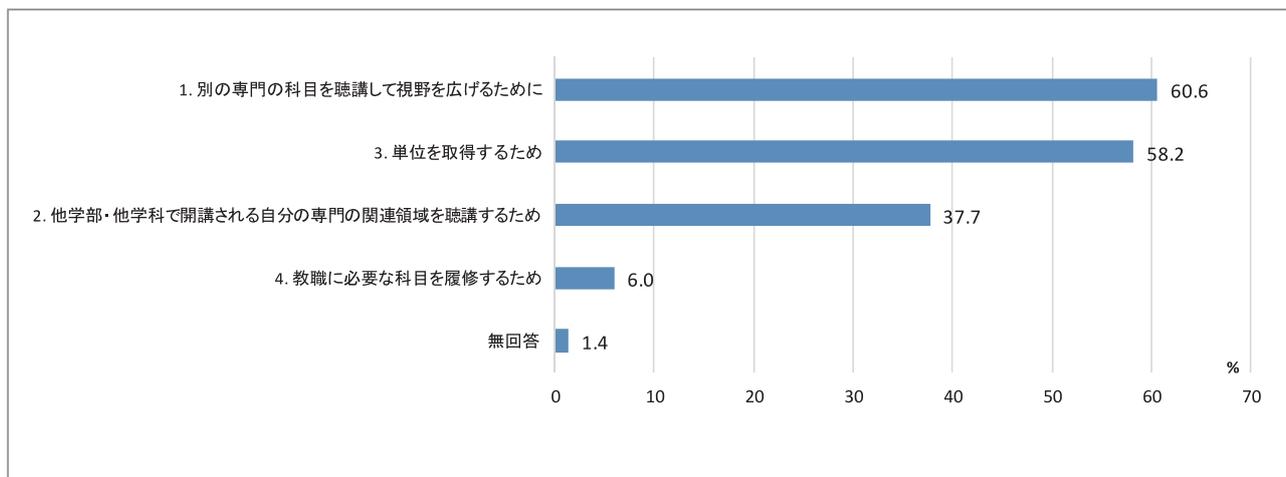
「他学部聴講」の経験者は約6割、「視野を広げる」ための聴講も約6割

Q14 他学部聴講等についてお聞きします。



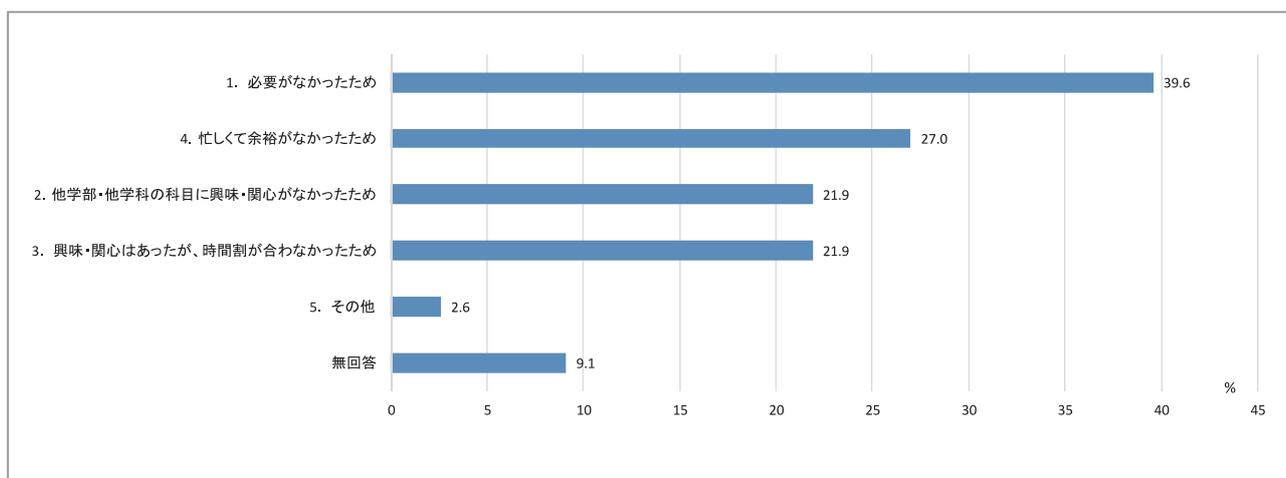
「A. 他学部の科目の聴講をしたことがある」者(57.5%)と「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」者(62.9%)は、6割前後となっている。「C. 後期教養科目の聴講をしたことがある」(13.8%)は1割強となっている。「A. 他学部の科目の聴講をしたことがある」者と「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」者は2015年度よりやや低い割合になっている(31頁)。「C. 後期教養教育科目の聴講をしたことがある」は、今回初めてたずねている。

Q14-SQ1. 上記A、B、Cのどれかで「はい」と答えた人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか。



他学部・他学科聴講や後期教養教育科目の受講をした者の意図は、「1. 別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」が60.6%と最も高い割合となっていて、次いで「3. 単位を取得するため」も58.2%と高い。

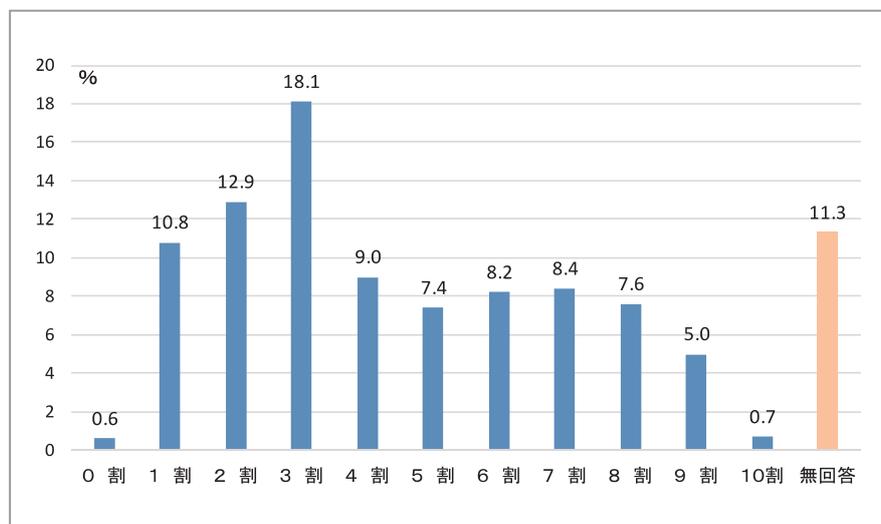
Q14-SQ2. 上記A、B、Cのいずれも「いいえ」と答えた人にお聞きします。なぜ聴講しませんでしたか。



今回、他学部・他学科聴講や後期教養教育科目を受講しなかった者に、その理由をたずねた。「必要がなかったため」が39.6%と最も高い割合を占めている。次いで、「忙しくて余裕がなかったため」が27.0%、「他学部・他学科の科目に興味・関心がなかったため」と「興味・関心はあったが、時間割が合わなかったため」がいずれも21.9%となっている。

「優の割合」は3割が最も多く、次いで2割と1割

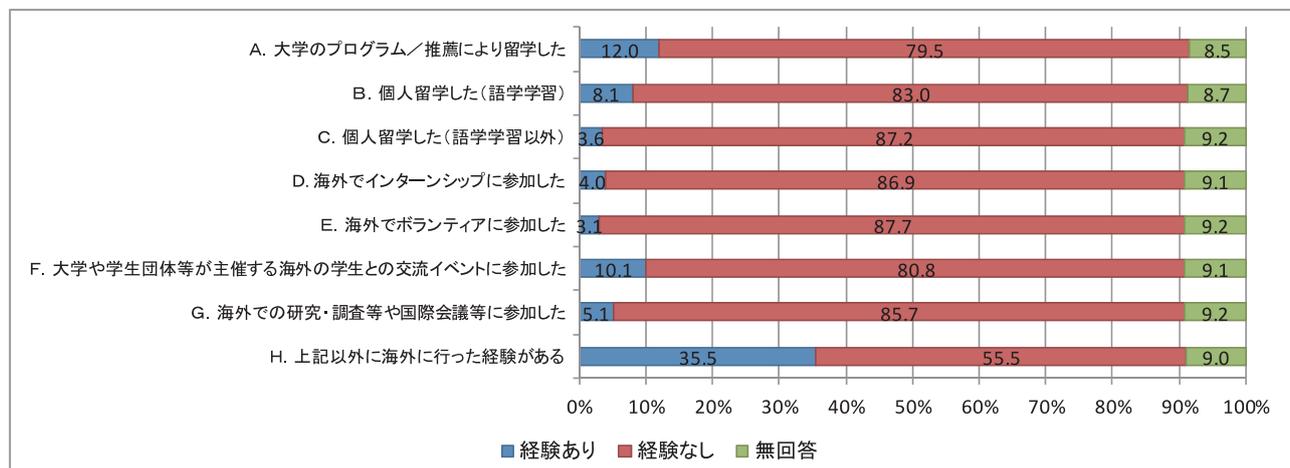
Q15 あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。数値を()に記入してください。「優上」を含めた割合をお答えください。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が18.1%と最も多く、次いで「2割」が12.9%、「1割」が10.8%となっており、対称ではなく、右に歪んだ分布になっている。「6割」、「7割」もそれぞれ8.2%、8.4%とやや高い割合を占め、平均では、4.3割となっている。

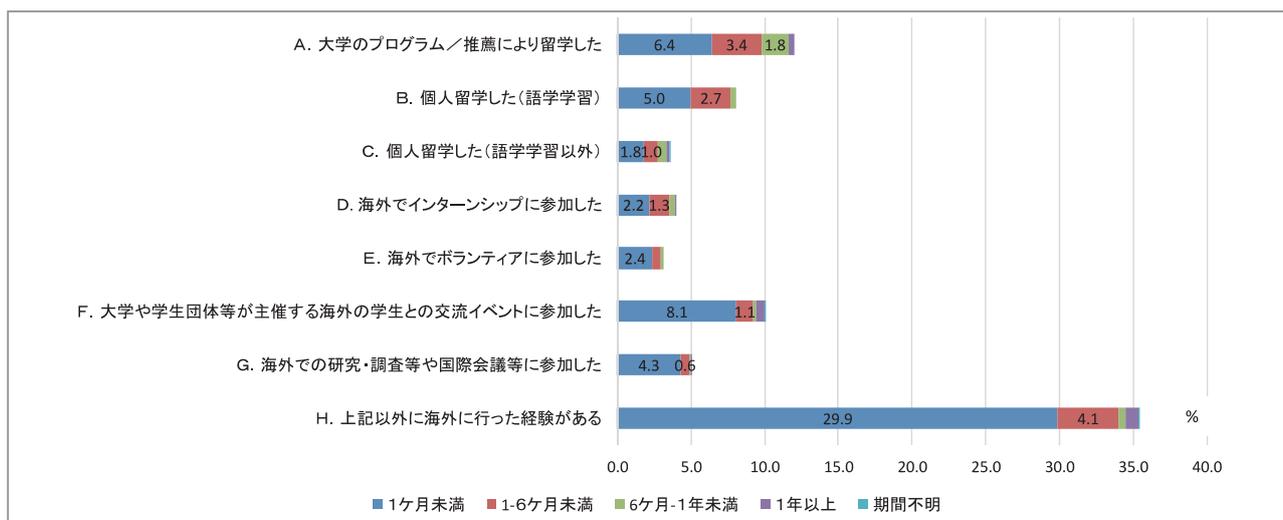
「海外経験」：「大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベント」と「大学のプログラム／推薦により留学」は約1割、「個人留学（語学学習）」は1割以下

Q16 在学時の海外経験等について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



在学時の海外経験等で、最も高い割合を示すのは、「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」12.0%、次いで「F. 大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」10.1%で、次に「B. 個人留学した(語学学習)」8.1%、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」5.1%の順である。これに対して「E. 海外でボランティアに参加した」3.1%、「C. 個人留学した(語学学習以外)」3.6%、「D. 海外でインターンシップに参加した」4.0%と経験者の割合は低い。また、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」35.5%と約3分の1になっている。「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」は、年度ごとに増加している(26頁)。

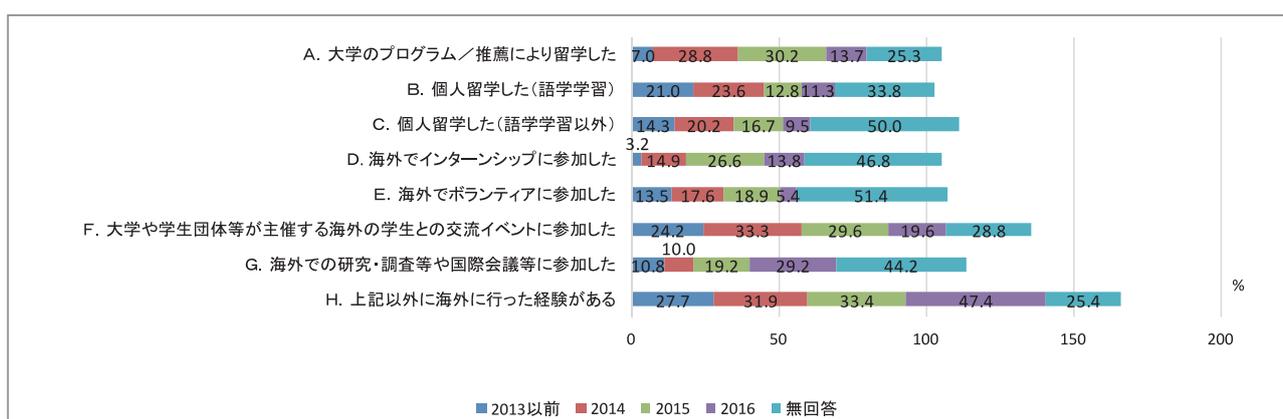
「海外経験」の期間は、すべての項目で1ヶ月未満が最も高い割合



海外経験の期間は、すべての項目で1ヶ月未満が最も高い割合となっている。特に、「F. 大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」では8.1%と経験者全体(10.1%)の約8割、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」では4.3%と経験者全体(5.1%)の8割以上を占めている。

「海外経験」の時期：学年が上がるにつれて増加する傾向、「B. 個人留学した(語学学習)」、「C. 個人留学した(語学学習以外)」、「F. 大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は2年次が最も高い割合

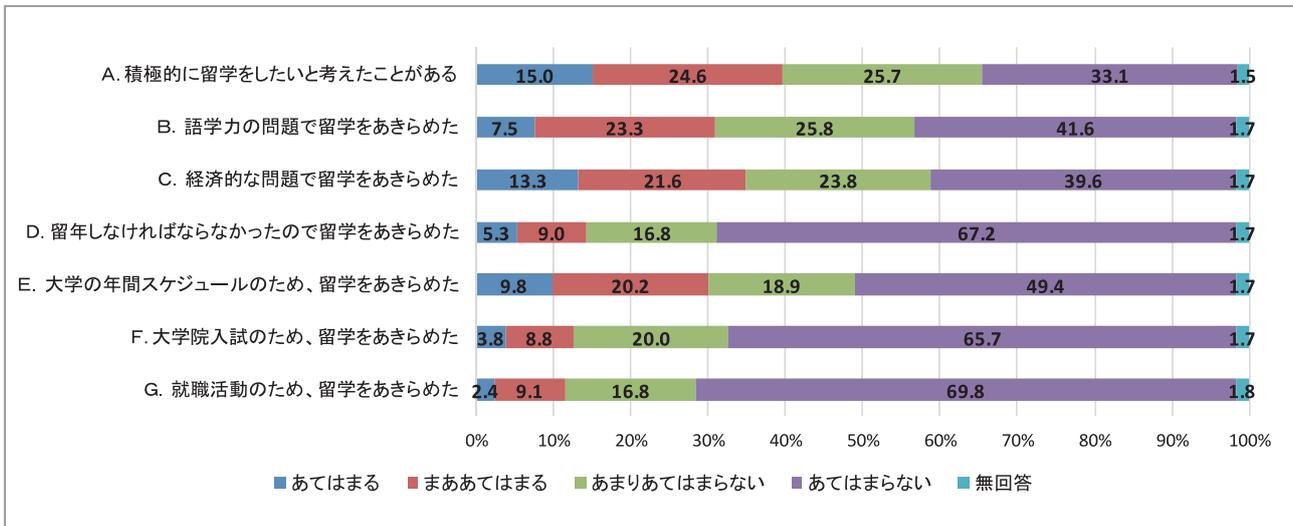
Q16-SQ1 前問で、A～Hで1～4を選択した場合はQ 16-SQ1にお答えください。複数の年度で複数回経験している場合には、それぞれの年度に○をつけてください。



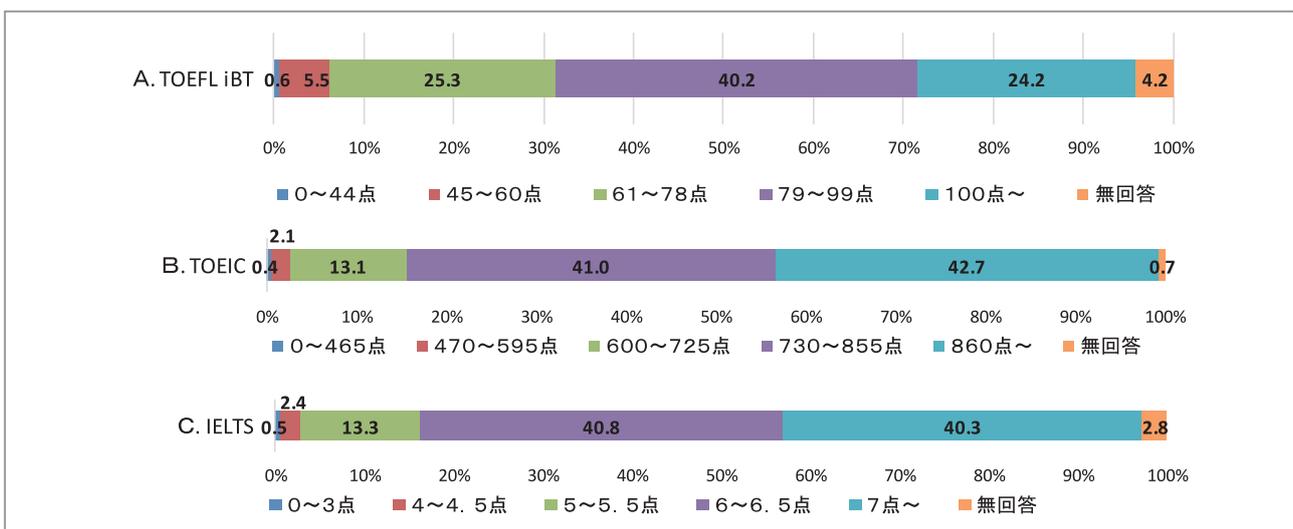
前問(Q16)の海外経験について、経験者に何年度に経験をしたかをたずねた。複数回答のため、合計は100%を超えている。国際活動の時期は、プログラムにより差はあるが、2013年度以前(4年制で1年次、6年制で3年次以前に相当)は少なく、学年が上がるに従って割合が高くなる傾向が見られる。しかし、「B. 個人留学した(語学学習)」、「C. 個人留学した(語学学習以外)」、「F. 大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は2014年度(4年制で2年次、6年制で4年次に相当)が最も高い割合となっている。

留学への障害は、経済的な問題、語学力の問題、大学の年間スケジュール (留学しなかった者のみ)

Q16-SQ2 在学中に留学しなかった人(上記のAからCの経験がない人)にお聞きします。

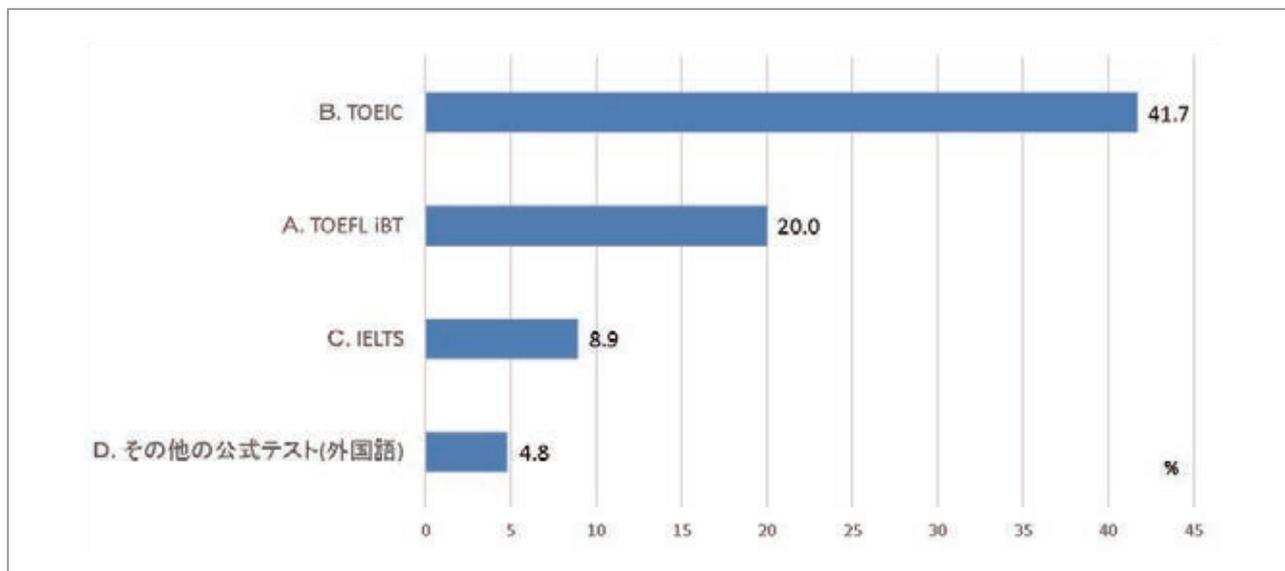


今回の調査から留学をしなかった者(「A. 大学のプログラム/推薦により留学した」、「B. 個人留学した(語学学習)」、「C. 個人留学した(語学学習以外)」のいずれにもあてはまらない者で全体の81.6%)に留学の障害をたずねた。留学の障害としては、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」者(「あてはまる」13.3%と「まああてはまる」21.6%を合わせて34.9%、以下同じ)、「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」者(30.8%)、「E. 大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめた」者(30.0%)がそれぞれ3割以上となっている。なお、今回の調査から「F. 大学院入試のため、留学をあきらめた」と「G. 就職活動のため、留学をあきらめた」に分けているが、いずれもあてはまるのは1割強となっている。



「TOEFL iBT 受験者」は約2割、「TOEIC 受験者」は半数近い。TOEFL iBT は「79～99点」、TOEIC は「860点以上」、IELTS は「6～6.5点以上」が最も高い割合

Q17 あなたは、在学中に TOEFL iBT や TOEIC、IELTS 等の公式テストを受験したことがありますか

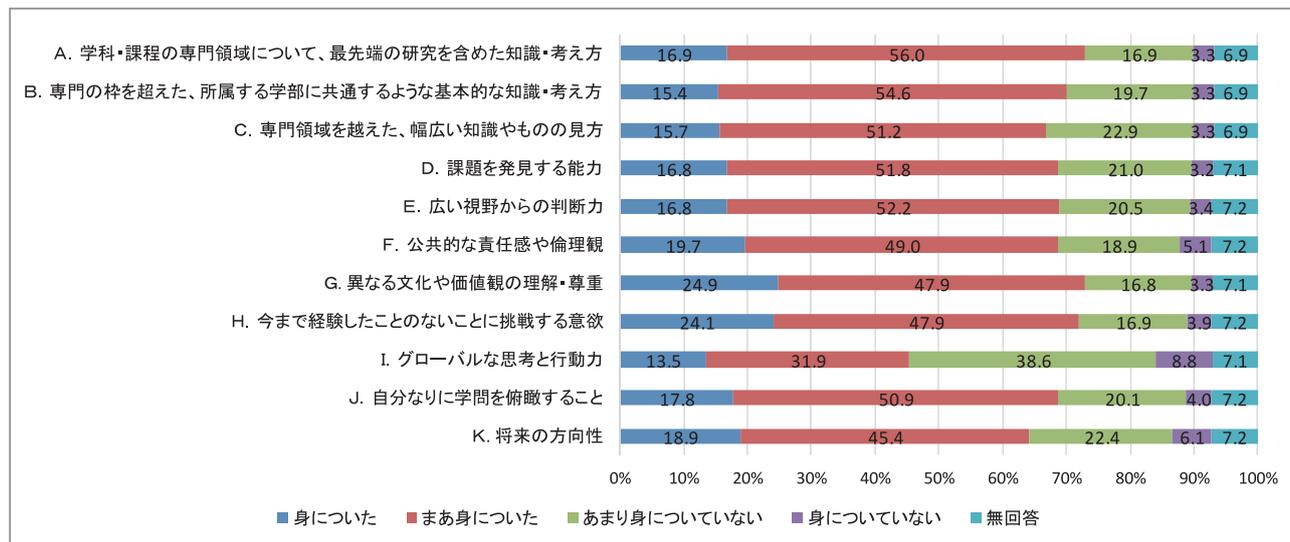


TOEFL iBT の受験者は 20.0% (2015 年度 17.7%, 以下同じ)、TOEIC 受験者は 41.7% (45.9%)、IELTS 受験者は 8.9% (2.3%)、その他の公式テストは 4.8% (3.9%) となっている。これまで、その他の公式テストを除いて、いずれもやや減少傾向にあったが、TOEIC を除いてやや増加している。

それぞれの得点の分布は、満点が異なるため、割合で示すと、TOEFL iBT は「79～99点」(40.2%)、TOEIC は、「860点～」(42.7%)、IELTS は「6～6.5点」(40.8%) が最も高い割合となっている。

身につけた能力：「最先端の知識・考え方」、「異なる文化や価値観の理解・尊重」、「今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」、「学部に通ずる基本的な知識・考え方」、「幅広い知識やものの見方」、「学問を俯瞰すること」、「広い視野からの判断力」を身につけた者は7割前後、「グローバルな思考と行動力」は4割半

Q18 あなたは、つぎのような点を身につけたと思いますか。

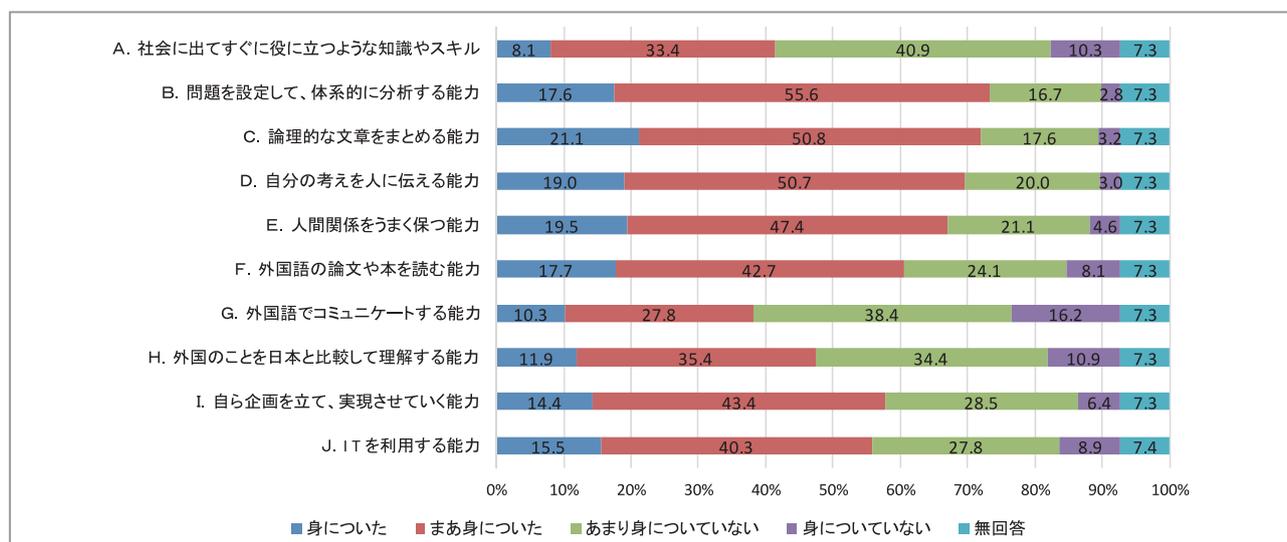


東京大学の教育を通じて身につけた能力では、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた知識・考え方」（「身についた」16.9%と「まあ身についた」56.0%を合わせて72.9%）、「G. 異なる文化や価値観の理解・尊重」（「身についた」24.9%と「まあ身についた」47.9%を合わせて72.8%）、「H. 今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」（「身についた」24.1%と「まあ身についた」47.9%を合わせて72.0%）、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通ずるような基本的な知識・考え方」（「身についた」15.4%と「まあ身についた」54.6%を合わせて70.0%）は7割以上である。「E. 広い視野からの判断力」（「身についた」16.8%と「まあ身についた」52.2%を合わせて69.0%）、「F. 公共的な責任感や倫理観」（「身についた」19.7%と「まあ身についた」49.0%を合わせて68.7%）、「J. 自分なりに学問を俯瞰すること」（「身についた」17.8%と「まあ身についた」50.9%を合わせて68.7%）、「D. 課題を発見する能力」（「身についた」16.8%と「まあ身についた」51.8%を合わせて68.6%）、「C. 専門領域を超えた、幅広い知識やものの見方」（「身についた」15.7%と「まあ身についた」51.2%を合わせて66.9%）これらを身につけた者は3分の2を上回る。これらは毎年度ほとんど変化していない。

これに対して、「I. グローバルな思考と行動力」は「身についた」13.5%と「まあ身についた」31.9%を合わせて45.4%と身についたとする者は半数以下となっている。

「問題を設定して、体系的に分析する能力」、「論理的な文章をまとめる能力」、「自分の考えを人に伝える能力」が身についた者は約7割、「外国語の論文や本を読む能力」が身についた者は6割、「外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は約半数、「外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は4割弱

Q.19 あなたは、つぎのようなスキルや能力を身につけたと思いますか。



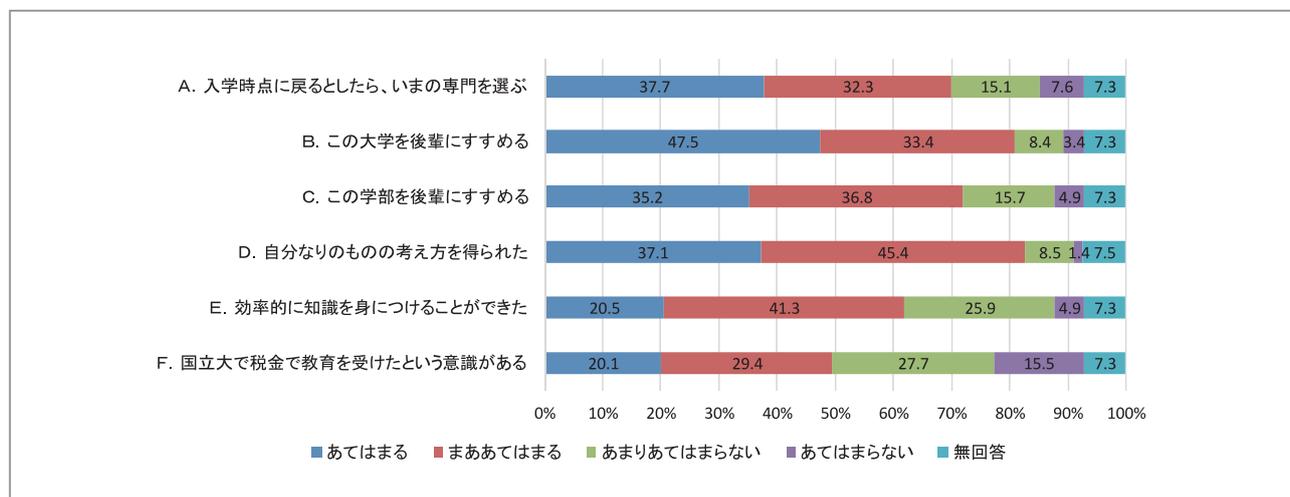
学生が大学時代を通じて身についたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」17.6%と「まあ身についた」55.6%を合わせて73.2%）、「C. 論理的な文章をまとめる能力」（「身についた」21.1%と「まあ身についた」50.8%を合わせて71.9%）、「D. 自分の考えを人に伝える能力」（「身についた」19.0%と「まあ身についた」50.7%を合わせて69.7%）、「E. 人間関係をうまく保つ能力」（「身についた」19.5%と「まあ身についた」47.4%を合わせて66.9%）といった汎用性の高い一般的な能力であり、3分の2以上である。

これに対して、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識やスキル」が身についたとしている者は半数以下（「身についた」8.1%と「まあ身についた」33.4%を合わせて41.5%）に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は6割（「身についた」17.7%と「まあ身についた」42.7%を合わせて60.4%）の者が身についたとしているのに対して、「H. 外国のことを日本と比較して理解する能力」は半数以下（「身についた」11.9%と「まあ身についた」35.4%を合わせて47.3%）、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は4割弱（「身についた」10.3%と「まあ身についた」27.8%を合わせて38.1%）に過ぎない。

「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、年度によって増減はあるものの、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきていた。とくに「身についた」者のみの割合は2008年度の5.7%から2013年度の10.6%へと、約2倍に増加している。その後は、2014年度は8.5%、2015年度は9.0%、2016年度は10.3%と、安定した傾向を示している（27頁）。

「自分なりのものの考え方を得られた」、「この大学を後輩にすすめる」、「この学部を後輩にすすめる」、「入学時点に戻るとしたら、今の専門を選ぶ」は7割以上

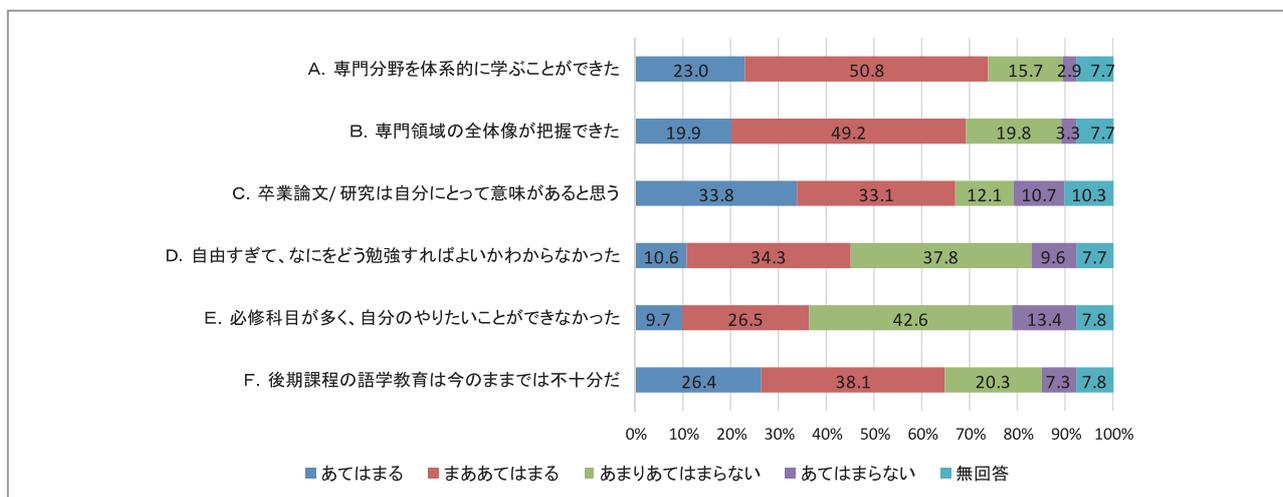
Q20 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。



大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「D. 自分なりのものの考え方を得られた」（「あてはまる」37.1%と「まああてはまる」45.4%で合わせて82.5%）、「B. この大学を後輩にすすめる」（「あてはまる」47.5%と「まああてはまる」33.4%で合わせて80.9%）、「C. この学部を後輩にすすめる」（「あてはまる」35.2%と「まああてはまる」36.8%で合わせて72.0%）「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」（「あてはまる」37.7%と「まああてはまる」32.3%で合わせて70.0%）が7割以上となっている。他方、「E. 効率的に知識を身につけることができた」者は約6割（「あてはまる」20.5%と「まああてはまる」41.3%で合わせて61.8%）、「F. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」（「あてはまる」20.1%と「まああてはまる」29.4%で合わせて49.5%）者は約半数になっている。

カリキュラムについては肯定的な回答が約7割だが、「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」という者は約3分の2、「必修科目が多く、自分のやりたいことができなかつた」という者は約4割

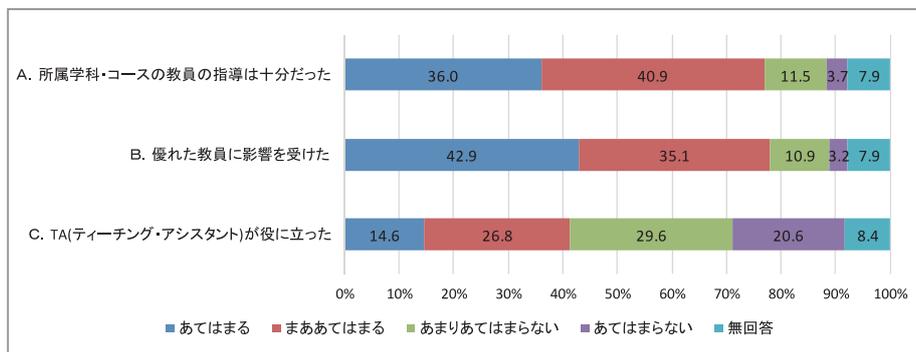
Q21 大学のカリキュラムについてお聞きします。



カリキュラムについては、「A. 専門分野を体系的に学ぶことができた」とする者が、73.8%（「あてはまる」23.0%と「まああてはまる」50.8%を合わせた回答）と7割以上となっている。次いで、「B. 専門領域の全体像が把握できた」とする者が約7割（「あてはまる」19.9%と「まああてはまる」49.2%を合わせた回答69.1%）、「C. 卒業論文/研究は自分にとって意味があると思う」とする者が約3分の2（66.9%）（「あてはまる」33.8%と「まああてはまる」33.1%を合わせた回答）となっている。他方、否定的な項目については、「F. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者が64.5%（「あてはまる」26.4%と「まああてはまる」38.1%を合わせた回答）と3分の2に近い。これに対して「D. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかつた」とする者は4割以上（44.9%）（「あてはまる」10.6%と「まああてはまる」34.3%を合わせた回答）、「E. 必修科目が多く、自分のやりたいことができなかつた」とする者は3分の1以上（36.2%）（「あてはまる」9.7%と「まああてはまる」26.5%を合わせた回答）となっている。とくに、「D. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかつた」は昨年度の30.9%から44.9%と14%、「F. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者も49.8%から64.5%と14.7%増加している（30頁）。

4分の3以上の者が「優れた教員に影響を受けた」、「教員の指導は十分」

Q22 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

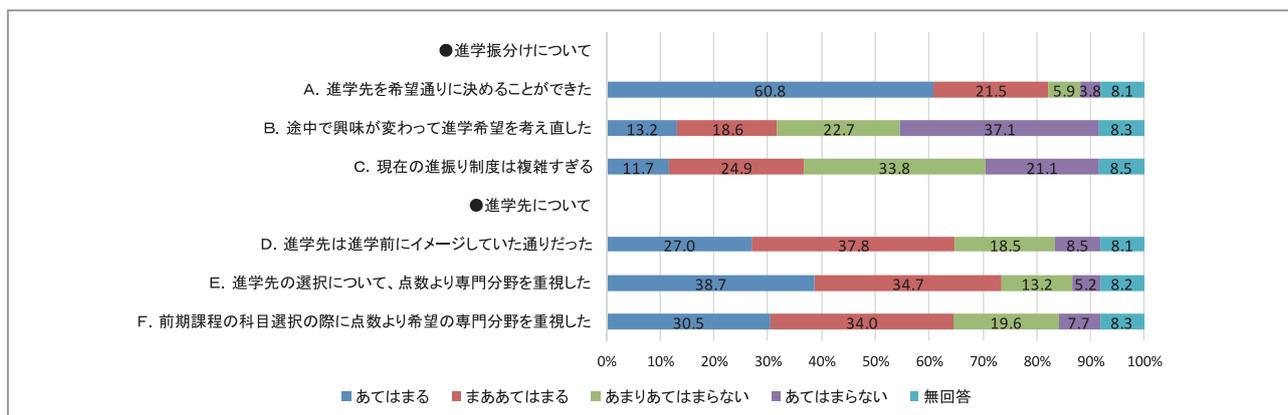


「B. 優れた教員に影響を受けた」(78.0%、「あてはまる」42.9%と「まああてはまる」35.1%を合わせた回答)、「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」(76.9%、「あてはまる」36.0%と「まああてはまる」

40.9%を合わせた回答)が4分の3以上となっている。反面、「C. TA(ティーチング・アシスタント)が役に立った」と評価するのは41.4%（「あてはまる」14.6%と「まああてはまる」26.8%を合わせた回答）と、約4割になっている。なお、昨年度までは、「C. TA(ティーチング・アシスタント)が機能していた」および「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」となっていた。

「進学先」は「希望通り」：8割以上、「進学希望を考え直した」：約3分の1

Q23 進学振分けや進学先についてお聞きします。

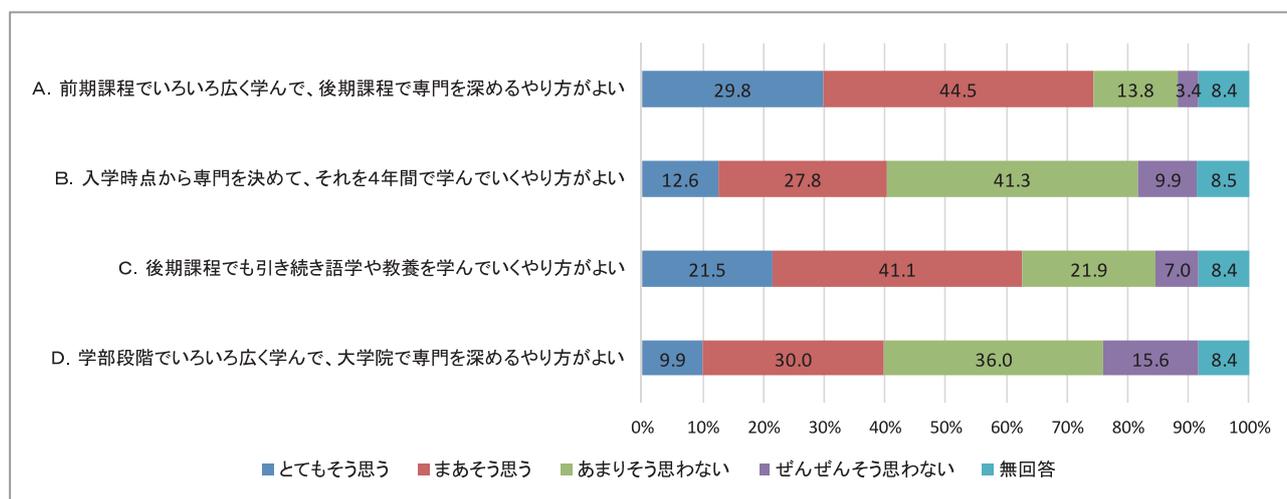


「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、82.3%（「あてはまる」60.8%と「まああてはまる」21.5%を合わせて）と8割を超えている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者も3割以上（31.8%）（「あてはまる」13.2%と「まああてはまる」18.6%を合わせて）となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、64.8%（「あてはまる」27.0%と「まああてはまる」37.8%を合わせて）で約3分の2だが、「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」は36.6%（「あてはまる」11.7%と「まああてはまる」24.9%を合わせて）で3分の1以上の者が複雑すぎるとしている。「E. 進学先の選択について、点数より専門分野を重視した」は、約7割（73.4%）（「あてはまる」38.7%と「まああてはまる」34.7%を合わせて）となっている。「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望の専門分野を重視した」は約3分の2（64.5%）（「あてはまる」30.5%と「まああてはまる」34.0%を合わせて）である。

「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は87.6%で、2013年度には83.5%、2014年度には81.9%、2015年度には82.7%、2016年度は82.3%とやや減少傾向にある（37頁）。また、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2010年度には36.3%で、2013年度は32.5%、2016年度は31.8%とやや減少傾向にある（37頁）。

「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」現行方式を評価する者が約4分の3だが、「後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」という者も6割以上

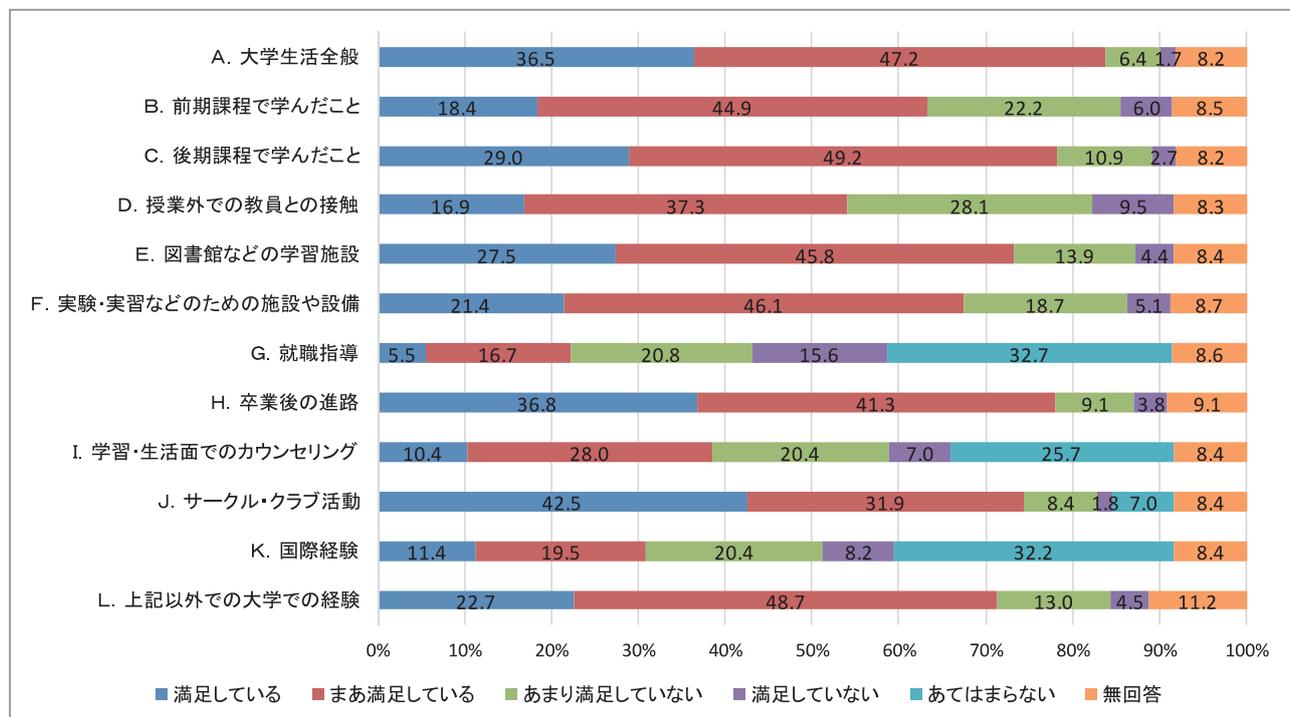
Q24 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。



専門と教養の学習の仕方については、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する者が、「とてもそう思う」29.8%と「まあそう思う」44.5%を合わせて4分の3（74.3%）で、これに対して、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する者は4割（40.4%）（「とてもそう思う」12.6%と「まあそう思う」27.8%を合わせて）となっている。これは、2015年度より6.4%増加である（39頁）。また、両者の中間の方式として「C. 後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」とする者も62.6%（「とてもそう思う」21.5%と「まあそう思う」41.1%を合わせて）と6割以上となっている。これは2015年度より3%増加である（40頁）。また、今回の調査ではじめて「D. 学部段階でいろいろ広く学んで、大学院で専門を深めるやり方がよい」とたずねた。そう思うは4割（39.9%）（「とてもそう思う」9.9%と「まあそう思う」30.0%を合わせて）となっている。なお、「C. 後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」は、2015年度までは「前期課程で専門の基礎を固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学んでいくやり方がよい」となっていた。

満足度：「大学生活全般」約8割半、「前期課程」約6割、「後期課程」約8割「就職指導」への満足度は低いが、「卒業後の進路」については約8割が満足

Q25 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

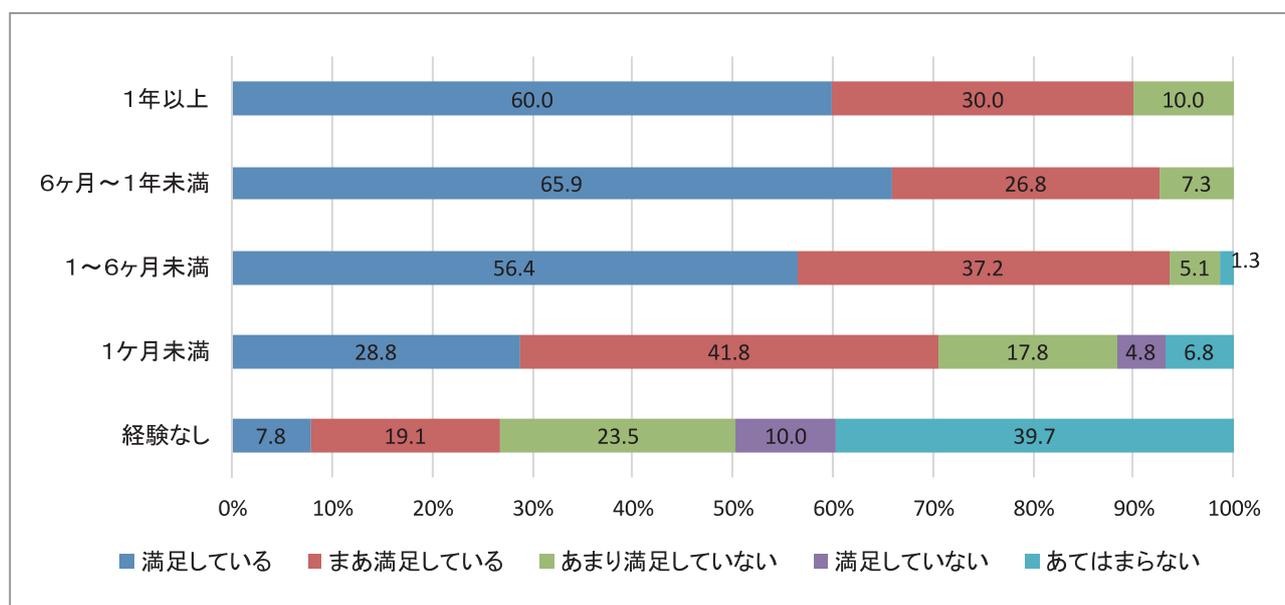


「A. 大学生活全般」に満足している者は8割以上（83.7%）（「満足している」36.5%と「まあ満足している」47.2%を合わせた回答）である。「B. 前期課程で学んだこと」（63.3%）は約6割（「満足している」18.4%と「まあ満足している」44.9%を合わせた回答）、「C. 後期課程で学んだこと」（78.2%）は約8割（「満足している」29.0%と「まあ満足している」49.2%を合わせた回答）、「H. 卒業後の進路」（78.1%）（「満足している」36.8%と「まあ満足している」41.3%を合わせた回答）も約8割が満足している。

これに対して、「G. 就職指導」の満足度は約2割（22.2%）（「満足している」5.5%と「まあ満足している」16.7%を合わせた回答）と依然として低いが、2014年度より増加傾向にある（43頁）。とくに、卒業後の進路（Q26、後述）と明確な関連はみられない。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」（38.4%）（「満足している」10.4%と「まあ満足している」28.0%を合わせた回答）も4割以下の者しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」（54.2%）（「満足している」16.9%と「まあ満足している」37.3%を合わせた回答）についても、満足している者は半数を少し上回るに過ぎない。さらに、「K. 国際経験」について満足している者は、3割（30.9%）（「満足している」11.4%と「まあ満足している」19.5%を合わせた回答）にすぎないが、増加傾向にある（27頁）。なお、「E. 図書館などの学習施設」の満足度は年々減少傾向にあり、2008年度に比べて2016年度は10%近く低下している（36頁）。なお、今回から、「G. 就職指導」、「I. 学習・生活面でのカウンセリング」、「J. サークル・クラブ活動」、「K. 国際経験」については、「あてはまらない」という選択肢を追加しているため、経年比較には留意する必要がある。

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

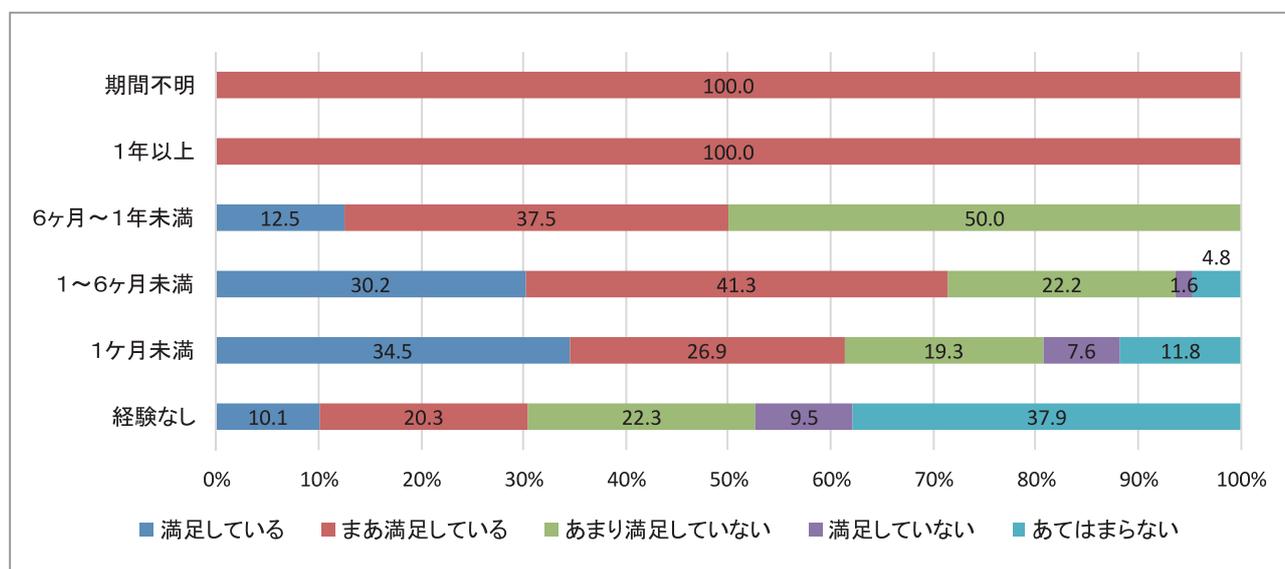
Q16A. 大学のプログラム／推薦により留学した別 Q25K. 国際経験満足度



上の図は、「Q 16 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q 25 K. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際経験のない者では、満足度（「満足している」（7.8%）と「まあ満足している」（19.1%）を合わせた割合）は26.9%と著しく低く、これに対して、「国際経験」のある者では、「1ヶ月未満」の経験期間の者の満足度が最も低いが、それでも7割（70.6%）を越えている。それ以上の期間の国際経験のある者では、いずれも9割を超えている。このように、国際経験のある者の方が満足度は高まっている。また、留学経験の長い者ほど満足度は高い。ただし、「1～6ヶ月未満」の満足度が最も高くなっている。

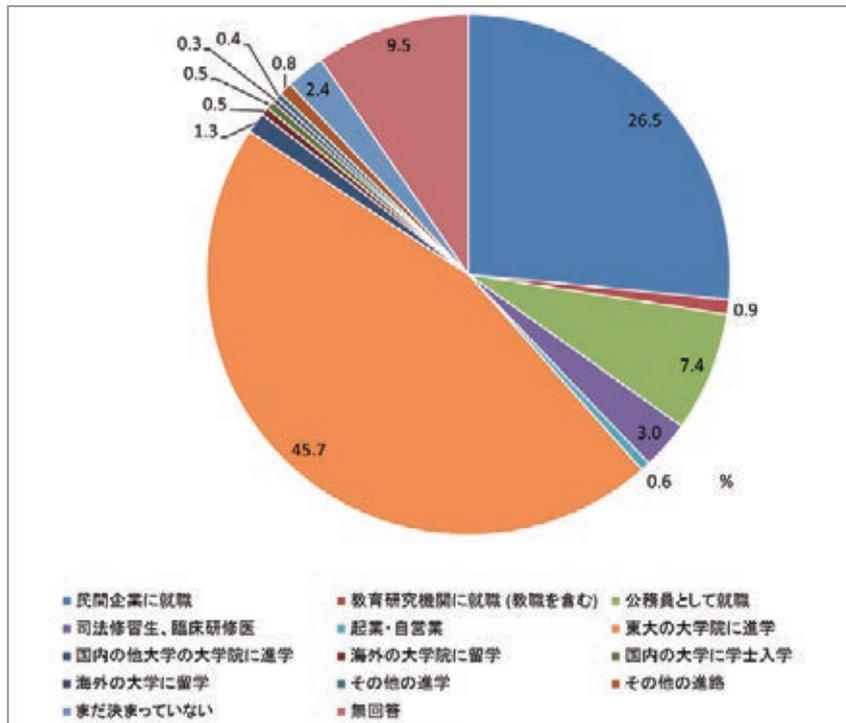
これに対して、下の図は、同じように、「Q 16 B. 個人留学した（語学学習）」と「Q 25 K. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「Q 16 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、個人留学の国際経験のない者では、満足度は約3割と低く、国際経験のある者の方が満足度は高い。しかし、全体的に満足度は「Q 16 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」より低くなっている。

Q16B. 個人プログラムにより留学した（語学学習）別 Q25K. 国際経験満足度



「卒業後の予定」：「進学」が半数近く、「就職」が4割

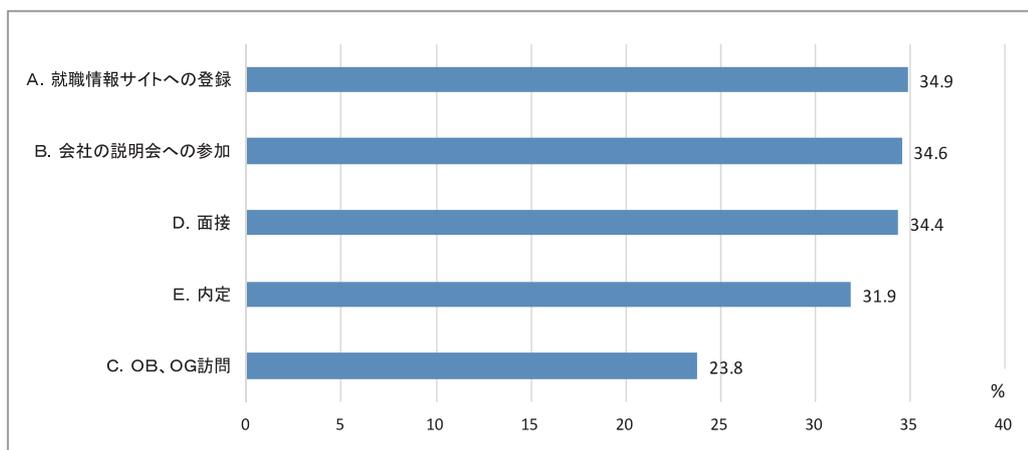
Q26 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。



4月からの予定としては、「東大の大学院に進学」(45.7%)「国内の他大学の大学院に進学」(1.3%)、「海外の大学院に留学」(0.5%)と合わせて、大学院進学予定は、47.5%となっている。さらに、「国内の大学に学士入学」(0.5%)と「海外の大学に留学」(0.5%)と「その他の進学」(0.4%)を合わせて進学は48.9%と半数に近い。これに対して、「企業に就職」は約4分の1(26.5%)で、次いで、「公務員として就職」(7.4%)、「司法修習生、臨床研修医」(3.0%)、「教育研究機関

に就職」(0.9%)、「起業・自営業」(0.6%)と合わせて就職予定は、約4割(38.4%)となっている。「進路未定」は2.4%、「その他の進路」は0.8%ときわめて少ない。

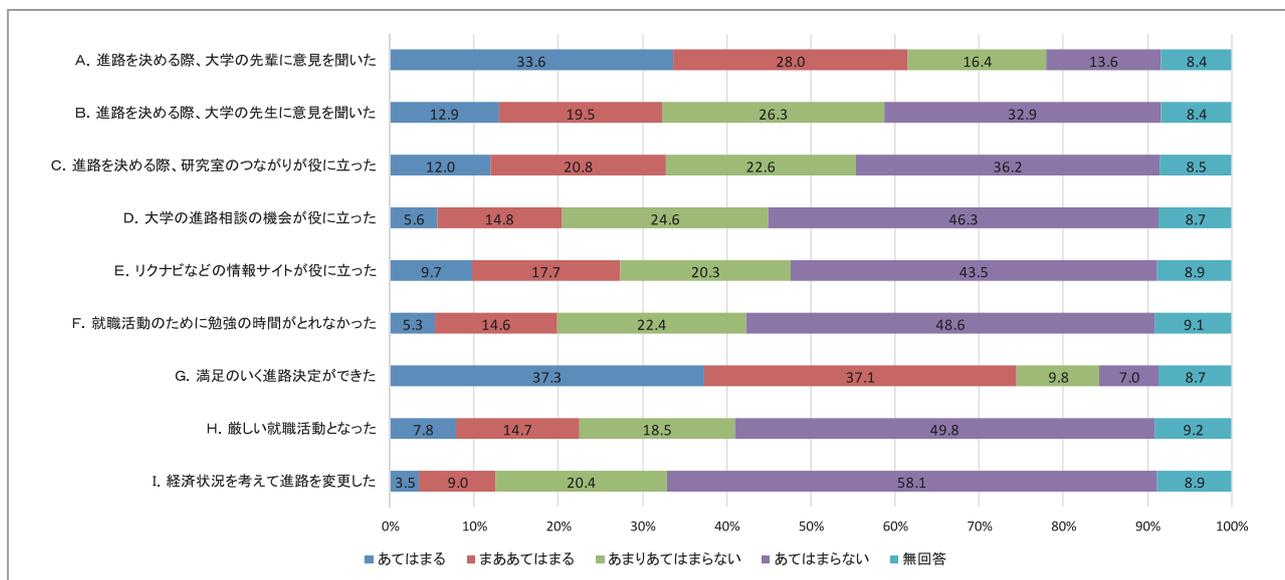
Q26-SQ 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には()に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては、「A. 就職情報サイトへの登録」(34.9%)と最も高い割合を示しているが、以下、「B. 会社の説明会への参加」(34.6%)と「D. 面接」34.4%とほぼ等しい。また、「E. 内定」に関しては、31.9%が「内定」を受けている。これに対して、「C. OB、OG訪問」は23.8%と低い割合となっている。なお、4月からの予定(Q26)を「働く」とした者に限ると94.5%が「内定」を受けている。

「進路決定」：「大学の先輩の意見」が約6割、4分の3の者が「満足のいく進路決定ができた」が、「厳しい就職活動になった」も就職者の4割弱

Q27 あなたの卒業後の進路と決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「A. 先輩」で（「あてはまる」33.6%と「まああてはまる」28.0%を合わせて61.6%）と約6割となっている。「B. 大学の先生」（32.4%）（「あてはまる」12.9%と「まああてはまる」19.5%を合わせて）と「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」（32.8%）（「あてはまる」12.0%と「まああてはまる」20.8%を合わせて）は約3割となっている。「G. 満足 of いく進路決定ができた」のは約4分の3（74.4%）（「あてはまる」37.3%と「まああてはまる」37.1%を合わせて）で、昨年度の66.8%よりやや高くなっている。「H. 厳しい就職活動となった」（22.5%）（「あてはまる」7.8%と「まああてはまる」14.7%を合わせて）と「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」（19.9%）（「あてはまる」5.3%と「まああてはまる」14.6%を合わせて）はともに約2割だが、4月からの予定（Q26）を「働く」とした者に限ると、それぞれ40.7%と37.9%と4割前後になる（グラフは省略）。また、「I. 経済状況を考えて進路を変更した」は、12.5%（「あてはまる」3.5%と「まああてはまる」9.0%を合わせて）で、2014年度の9.5%から2015年度の8.8%へとわずかに減少しているが、2016年度はやや増加した。「G. 満足 of いく進路決定ができた」と「H. 厳しい就職活動となった」は減少傾向にあるが、2016年度はやや増加している（41、42頁）。また、「D. 大学の進路相談の機会が役に立った」は、2割（20.4%）（「あてはまる」5.6%と「まああてはまる」14.8%を合わせて）と低いが、2015年度より5.3%増加している（42頁）。

9回の調査で変化が見られる項目

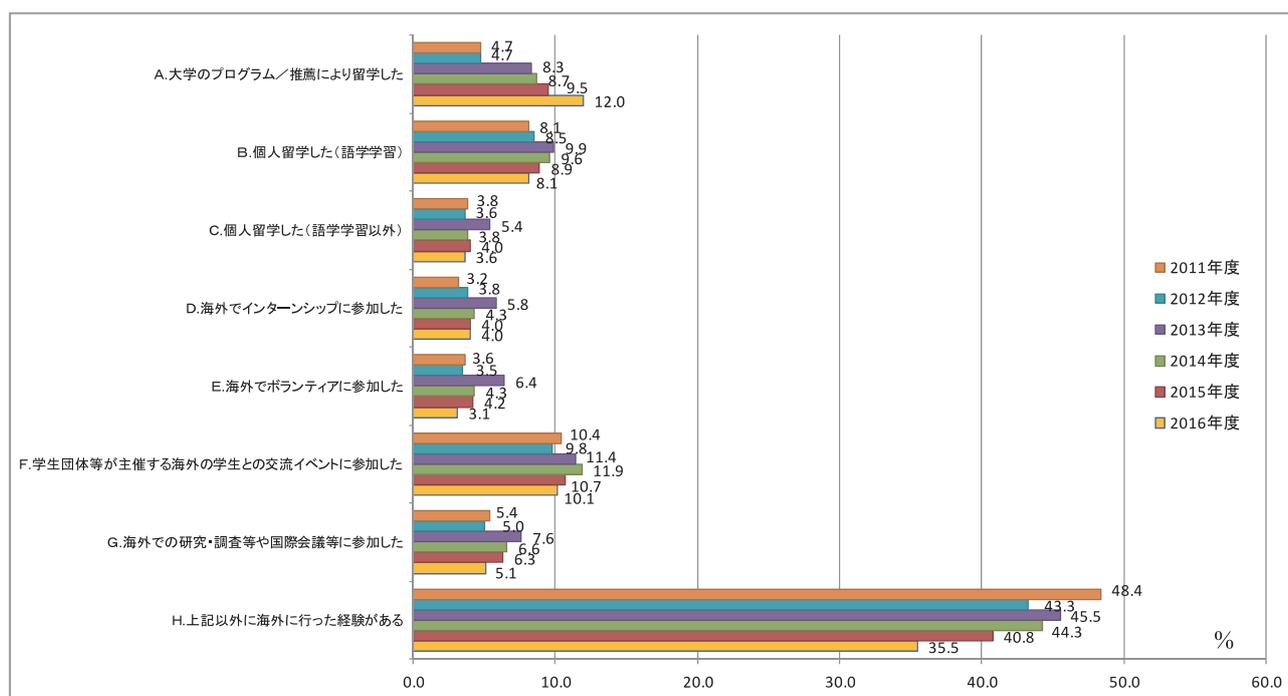
達成度調査は2008年度（2009年3月実施）の第1回から、2016年度（2017年3月実施）で、9回を数える。第1回の回収率は39.7%であったが、年度ごとに回収率が増加してきた。ただし、2016年度の回収率（75.5%）は、最も高い2012年度（81.7%）と比べ6.2%低くなっている。

この9回の調査項目を時系列的に見ると、多くの項目でそれほど大きな変化はみられない。もともと、身につけた能力の自己評価や満足度や意識などは比較的变化しにくい特性を持っている。しかし、それほど大きな差ではないが、この間に増加あるいは減少している質問項目も見られる。ここでは、それらの項目について、経年変化を見ることにする。

「国際活動」、「国際経験の満足度」、「外国語でコミュニケーションする能力」は増加する傾向にある

「大学のプログラム／推薦により留学した」者は増加傾向にある

Q16 在学時の海外経験等について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。

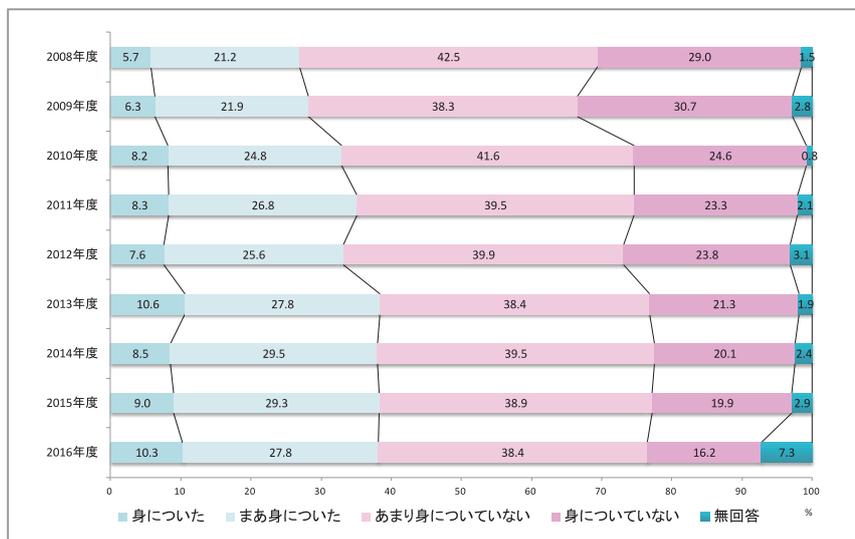


「A.大学のプログラム／推薦により留学した」者は2011年度から4.7%、4.7%、8.3%、8.7%、9.5%、12.0%と順調な増加傾向にある。「F.学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、10.4%、9.8%、11.4%、11.9%、10.7%、10.1%とわずかな増減を見せる。これに対して、「D.海外でインターンシップに参加した」は3.2%、3.8%、5.8%、4.3%、4.0%、4.0%、「B.個人留学した(語学学習)」は8.1%、8.5%、9.9%、9.6%、8.9%、8.1%、「E.海外でボランティアに参加した」は3.6%、3.5%、6.4%、4.3%、4.2%、3.1%、「G.海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は5.4%、5.0%、7.6%、6.6%、6.3%、5.1%で、これらはいずれも2013年度をピークに増加していたが、その後はやや減少傾向にある。「H.上記以外に海外に行った経験がある」は48.4%、43.3%、45.5%、44.3%、40.8%、35.5%で、2013年度以降は明らかに減少傾向にある。なお、「F.学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は、2016年度には「大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」に微修正した。

「外国語でコミュニケーションする能力」はやや増加する傾向にあるが、この4年間はほとんど変化なし

Q19 あなたは、つぎのようなスキルや能力を身につけたと思いますか。

外国語でコミュニケーションする能力

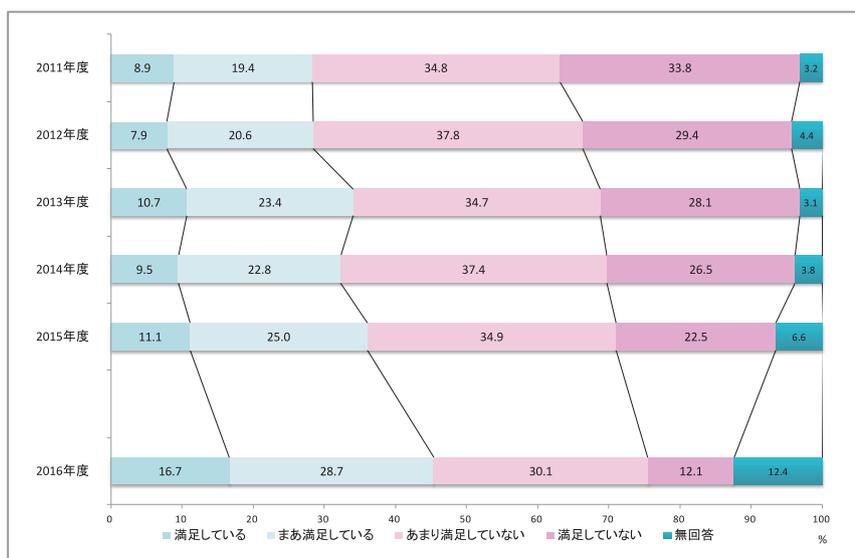


身につけた能力の自己評価で、この9年間に最も変化しているのは、「外国語でコミュニケーションする能力」で、2008年度には「身についた」5.7%、「まあ身についた」21.2%と合わせて26.9%であったが、年度ごとにやや増減はあるが、大きくみれば増加傾向にある。ただし、ここ4年間は「身についた」と「まあ身についた」と合わせて38%と安定している。

「国際経験」の満足度は年度により増減するものの、増加する傾向にある

Q25 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

国際経験



国際経験の満足度については、2011年度からたずねているが、2011年度は「満足している」8.9%と「まあ満足している」19.4%で合わせて28.3%であったが、その後、やや増加傾向にある。

2016年度より、この設問には「あてはまらない」というカテゴリを設けている。左図2016年度の割合は「あてはまらない」と回答した762人(32.2%)を

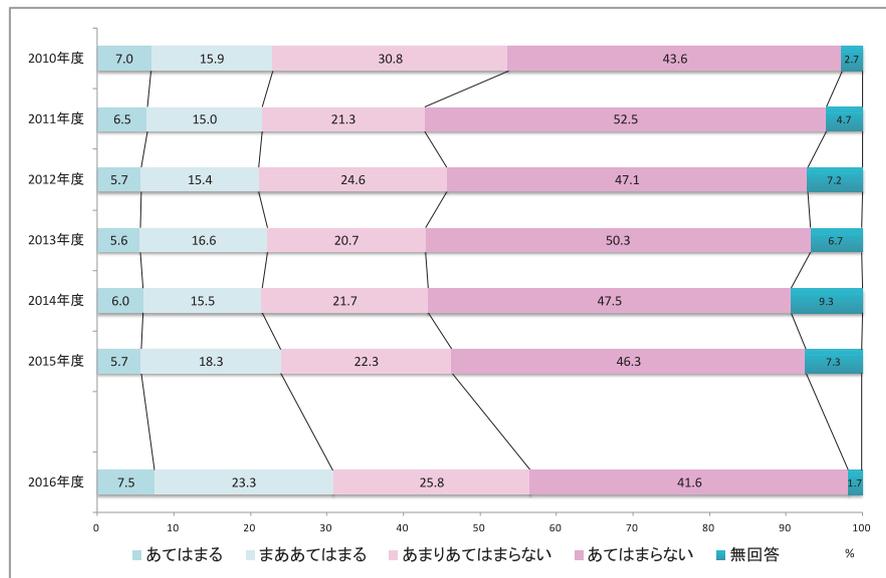
除いた回答者、つまり国際経験をもつ者の満足度を示している。「満足している」16.7%と「まあ満足している」28.7%で合わせて、満足している者の割合は45.4%となっている。

「留学への障害」は減少している、2016年度は留学経験のない人のみにたずねた

「語学力の問題で留学をあきらめた」者はわずかに増減だったが、2016年度では留学経験のない人の3割があてはまる

Q16-SQ2 在学中に留学しなかった人（上記のAからCの経験がない人）にお聞きします。

語学力の問題で留学をあきらめた

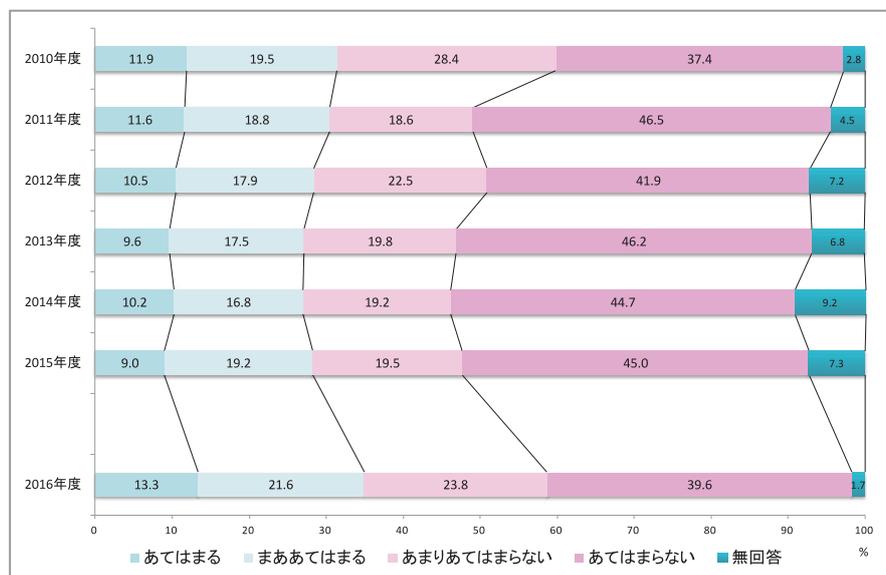


「語学力の問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」7.0%、「まああてはまる」15.9%で合わせて22.9%であった。多少の増減はあるが、2015年度には合わせて24.0%となっている。

2016年度より留学経験のない人のみ（全体の81.6%）にたずねることになり、「あてはまる」7.5%、「まああてはまる」23.3%で合わせて30.8%となる。つまり、留学経験のない人の3割が語学力の問題で留学をあきらめたという結果である。

「経済的な問題で留学をあきらめた」者は減少傾向だった、2016年度では留学経験のない人の約3割半があてはまる

経済的な問題で留学をあきらめた

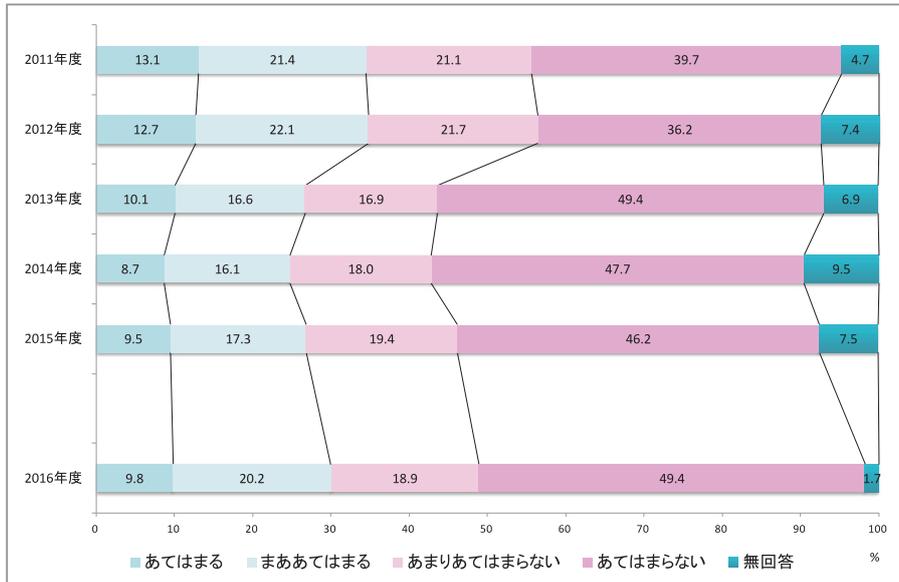


「経済的な問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」11.9%、「まああてはまる」19.5%で合わせて31.4%であったが、概ね減少している。

2016年度より、留学経験のない人のみに質問することになり、「あてはまる」13.3%、「まああてはまる」21.6%で合わせて34.9%となる。言い換えると、留学経験のない人の約3割半が経済的な問題で留学をあきらめている。

「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者は減少傾向、2016年度では留学経験のない人の3割があてはまる

大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった

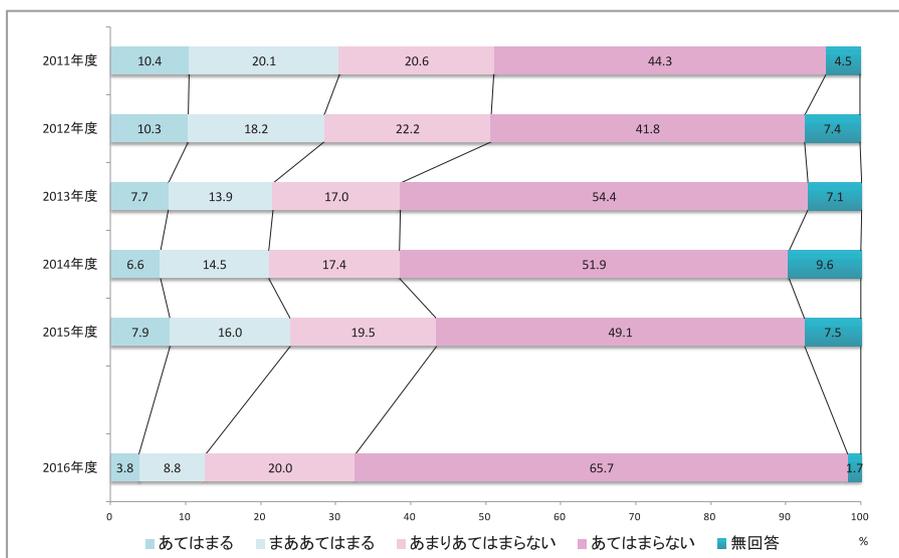


「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者の割合は、最初に調査された2011年度は「あてはまる」13.1%、「まああてはまる」21.4%で合わせて34.5%であったが、2013年度以降減少傾向にある。2016年度より、質問を「大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめた」に変更し、留学経験のない人のみにたずねた。「あてはまる」9.8%と「まああてはまる」20.2%で合わせてあてはまる人が30.0%である。留学経験のない人の3割が大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめたという回答である。

「あてはまる」9.8%と「まああてはまる」20.2%で合わせてあてはまる人が30.0%である。留学経験のない人の3割が大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめたという回答である。

「大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者も減少傾向にあるが、2016年度では留学経験のない人の1割強があてはまる

大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった



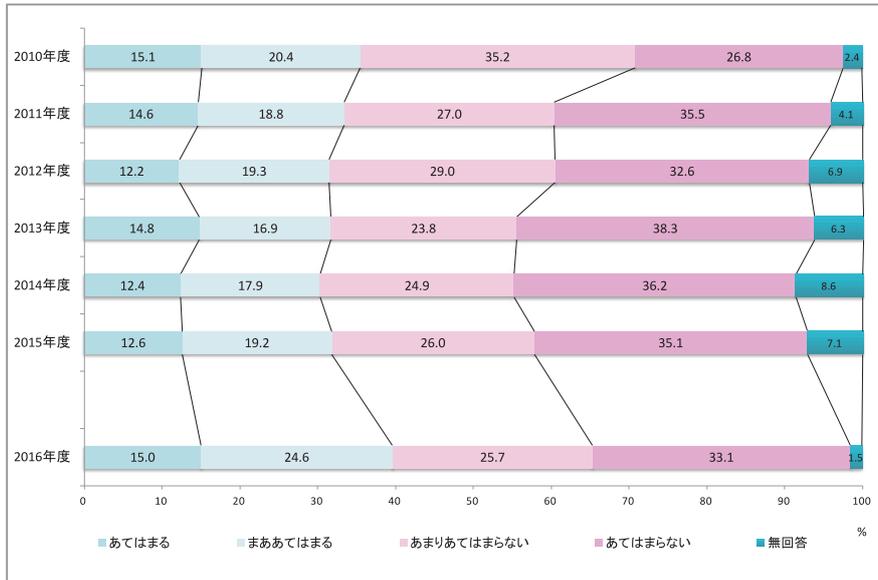
「大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者の割合も、最初に調査された2011年度は「あてはまる」10.4%、「まああてはまる」20.1%で合わせて30.5%であった。その後、わずかながら増減する。

2016年度は質問を「大学院入試のため、留学をあきらめた」に変更し、留学経験のない人のみにたずねた。「あ

てはまる」3.8%と「まああてはまる」8.8%で合わせてあてはまる者が12.6%である。つまり、留学経験のない人の1割強が大学院入試のため、留学をあきらめたという結果である。

「積極的に留学したい」者はやや減少傾向にあるが、2016年度では留学経験のない人の約4割があてはまる

積極的に留学をしたいと考えていた



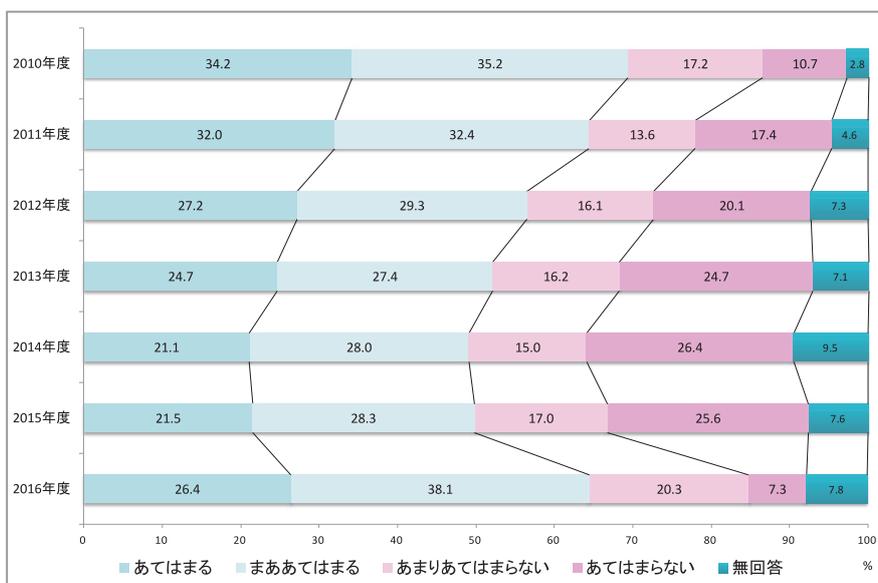
留学や語学学習について「積極的に留学をしたいと考えていた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」15.1%、「まああてはまる」20.4%で合わせて35.5%であった。その後、わずかに増減している。2016年度は留学経験のない人のみにたずねた。質問も「積極的に留学をしたいと考えたことがある」に変更している。結果として、「あてはまる」

15.0%、「まああてはまる」24.6%、合わせて39.6%の人があてはまる。つまり、留学経験のない人の約4割が積極的に留学したいと考えたことがある。

「後期課程の語学教育は不十分」とする者は大幅に減少する傾向にあるが、2016年度は大幅に増加

Q21 大学のカリキュラムについてお聞きします。

後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ



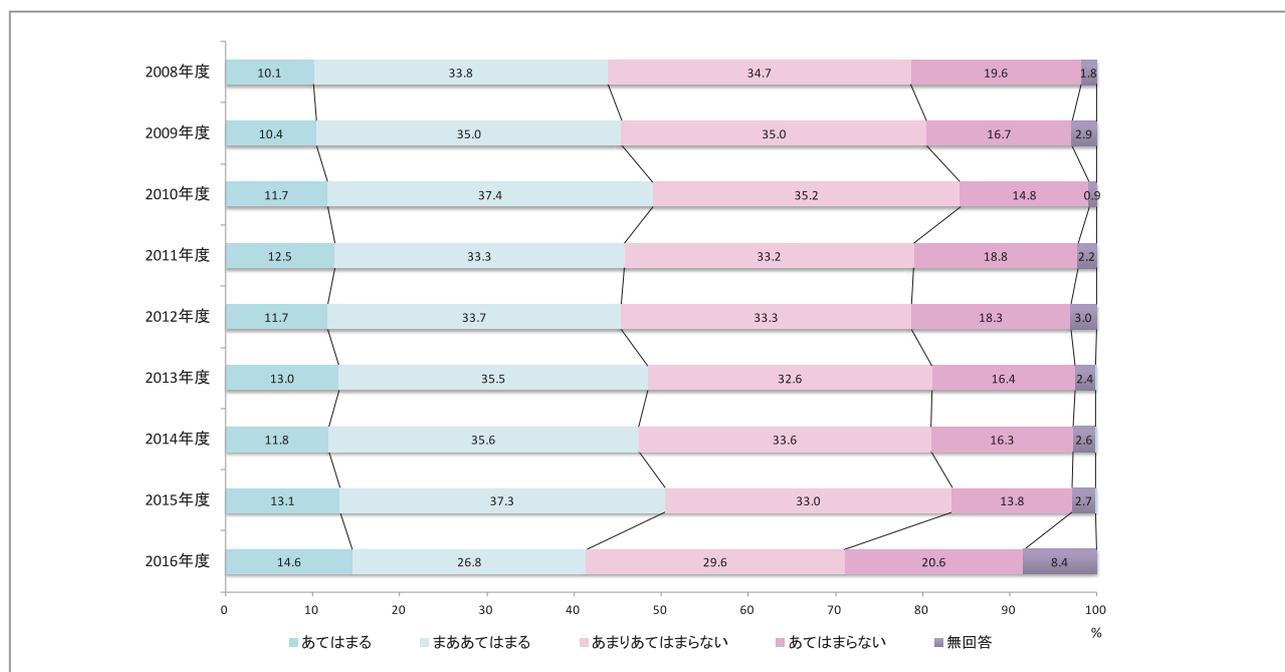
「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者の割合も、最初に調査された2010年度は「あてはまる」34.2%、「まああてはまる」35.2%で合わせて69.4%であったが、一貫して減少したものの、2015年度にはやや増加し、2016年度には「あてはまる」26.4%、「まああてはまる」38.1%で合わせて64.5%と大幅に増加している。

「インターンシップ」への参加は増加傾向、「ボランティア」への参加は減少

「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」はやや増加傾向にあった。2016年度は約4割の人が「TA（ティーチング・アシスタント）が役に立った」と回答している

Q22 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた

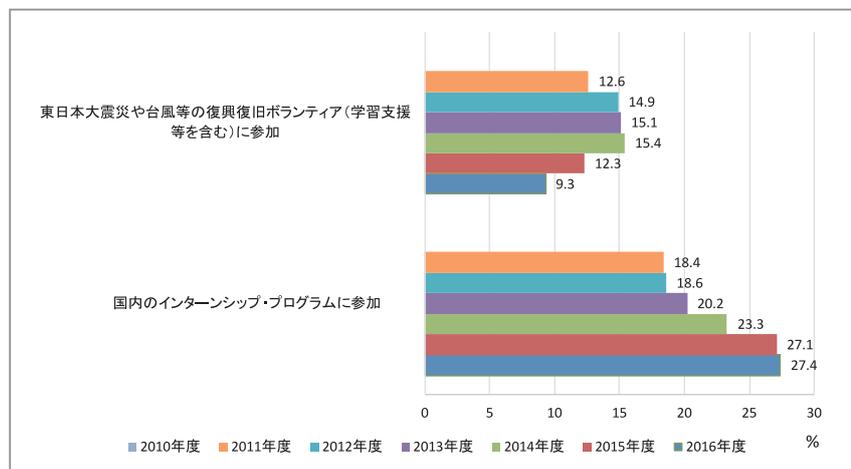


「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は、2008年度は「あてはまる」10.1%と「まああてはまる」33.8%を合わせて43.9%であったが、その後割合が増えたり減ったりしている。2016年度は「TA（ティーチング・アシスタント）が役に立った」と設問を修正した。「あてはまる」14.6%、「まああてはまる」26.8%、合わせて41.4%の回答者が「TAが役に立った」と評価している。「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」と「TA（ティーチング・アシスタント）が役に立った」という質問文の違いによりあてはまる割合が変化していると考えられる。

「ボランティア」に参加した者の割合は増加傾向にあったが、2015、2016年度は2年連続減少。「インターンシップ」に参加した者の割合は増加傾向

Q11 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等を含む）／国内のインターンシップ・プログラムに参加した



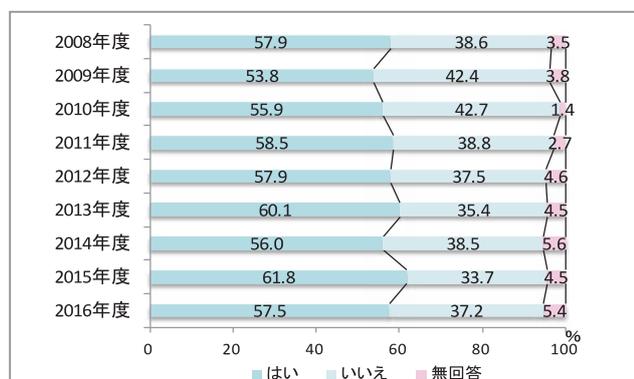
「東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等も含む）に参加」した者の割合も2011年12.6%、2012年度14.9%、2013年15.1%、2014年度15.4%と着実に増加していたが、2015年度は12.3%に減少している。2016年度の質問では「東日本大震災」を「震災」に変更した。回答者の9.3%が参加したと答えている。

「国内のインターンシップ・プログラムに参加」した者の割合は、2011年度18.4%、2012年度18.6%、2013年度20.2%、2014年度23.3%、2015年度27.1%、2016年度27.4%と着実に増加している。

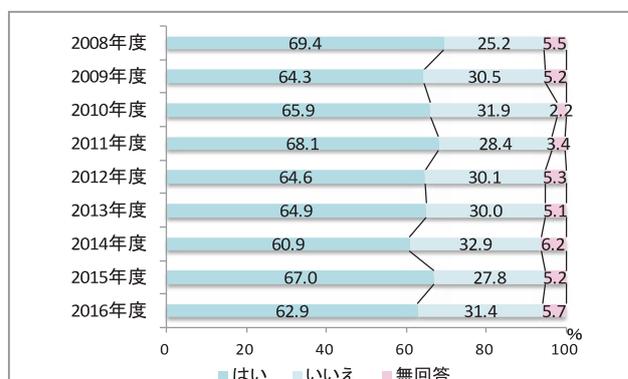
「他学部の科目の聴講」と「他学科の科目の聴講」は年度によりやや増減する

Q14 他学部聴講等についてお聞きします。

A. 他学部の科目の聴講をしたことがある



B. 他学科の科目の聴講をしたことがある



「他学部の科目を聴講したことがある」者の割合は、2008年度57.9%から、2011年度の58.5%まで増加していたが、2012年度以降は年度によって増減し、2015年度は61.8%とこれまでで最高となったものの、2016年度は57.5%に低下している。また、「他学科の科目の聴講」も同様に年度による増減はあるが、2008年度の69.4%から2014年度の60.9%に減少したあと、2015年度には67.0%へと増加し、2016年度はまた62.9%に減少している。

評価が下がったり、経験している割合が低くなっている項目もある

「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者はやや減少傾向だったが、2016年度はやや増加

Q 8 入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた

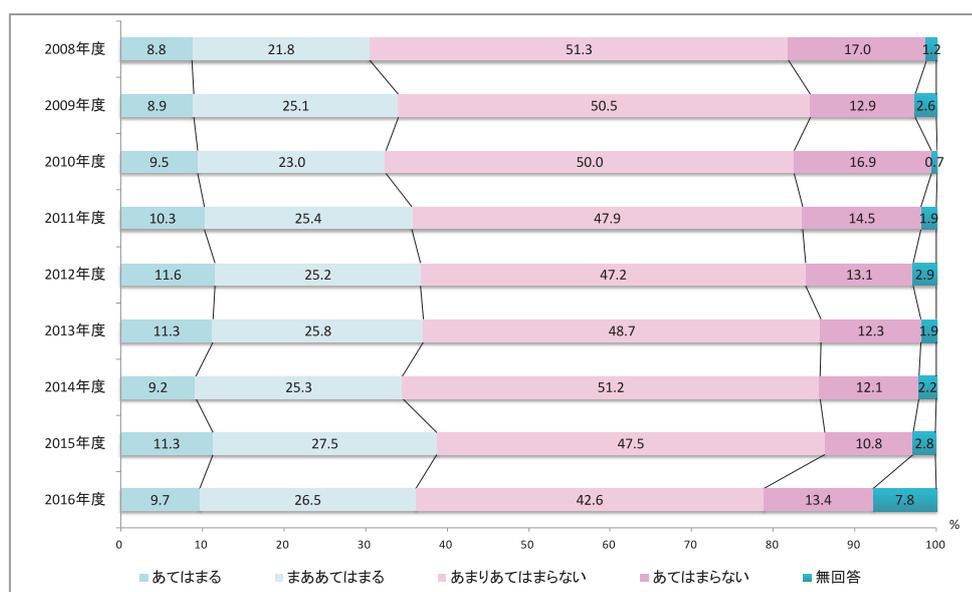


入学時の様子について、「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、年度ごとに増減はあるが、2008年度「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%であった。その後、やや減少傾向にあったものの、2016年度は「あてはまる」9.8%、「まああてはまる」28.9%で合わせて38.7%に増加している。

「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」は増加傾向にあったが、近年わずかに増減している

Q21 大学のカリキュラムについてお聞きします。

必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった



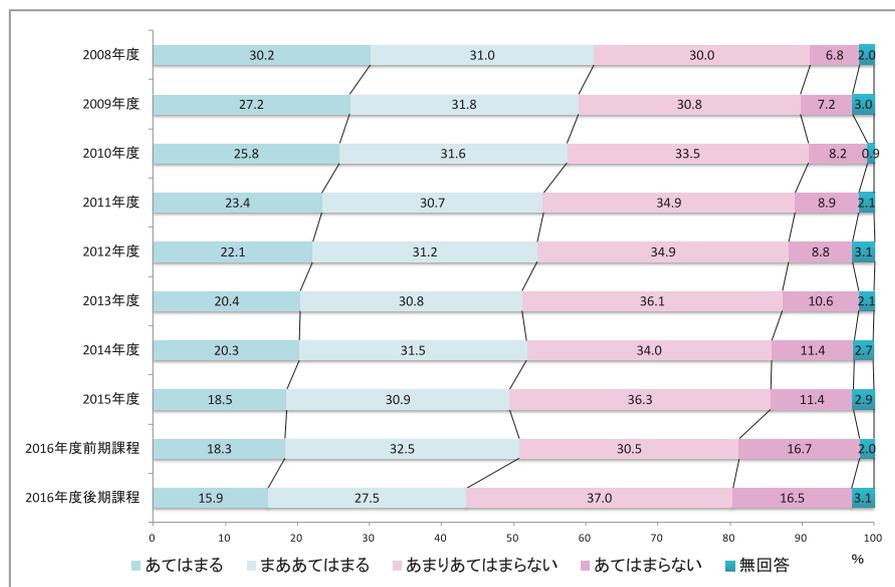
「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」は、2008年度は「あてはまる」8.8%と「まああてはまる」21.8%を合わせて30.6%であったが、2013年度まで37.1%と年々増加傾向にあった。2014年度にはやや減少し、2015年度には38.8%へと増加

し、2016年度には36.2%に減少している。なお、2016年度調査では、質問文から「かえて」を削除している。

「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は大幅に減少傾向

Q 9 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。

よく自分の専門以外の本を読んだ

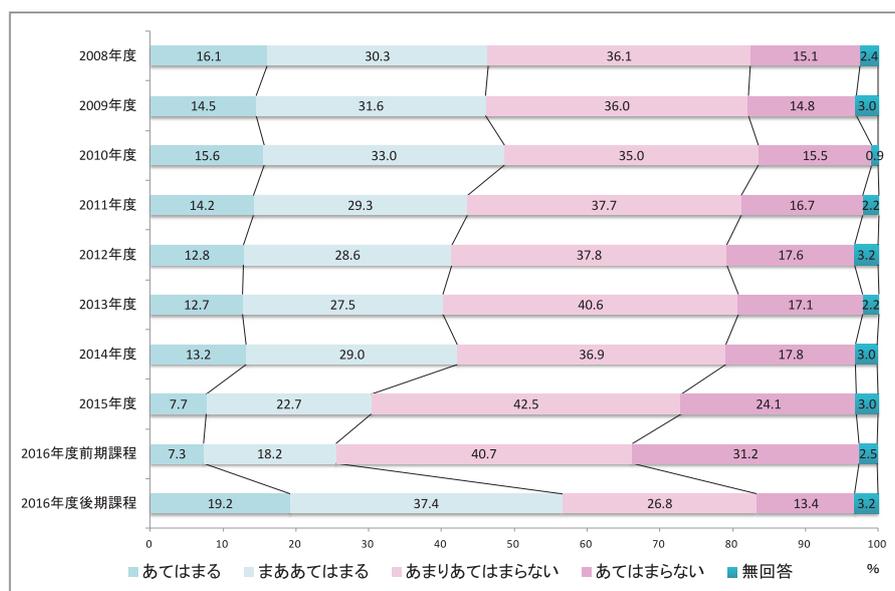


大学時代を通じての経験については、年度ごとに経験している者の割合が低下している項目が多い。「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は2008年度には「あてはまる」30.2%、「まああてはまる」31.0%で合わせて61.2%であったが、その後減少傾向にあり、2015年度には49.4%に減少している。2016年度では、前期課程と後期課程の状況をそれぞれた

ずねた。前期課程のあてはまる割合は50.8%（「あてはまる」18.3%、「まああてはまる」32.5%）、後期課程のあてはまる割合は43.4%（「あてはまる」15.9%、「まああてはまる」27.5%）という結果になっている。後期課程の「自分の専門以外の本をよく読んだ」割合のほうが明らかに低い。

「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」者も減少傾向にあるが、2016年度の後期課程では5割半があてはまる

社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ

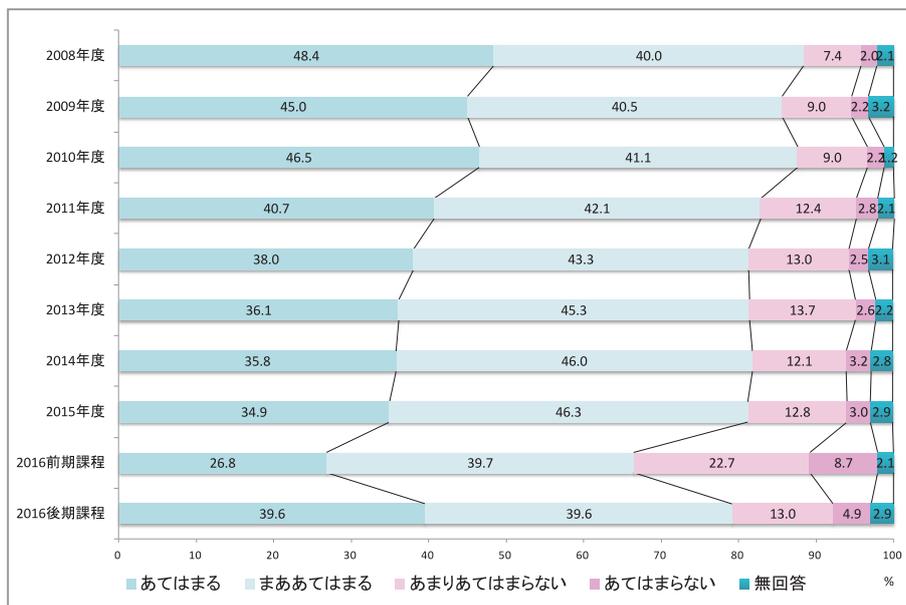


「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」は、2008年度には「あてはまる」16.1%、「まああてはまる」30.3%で合わせて46.4%であったが、若干の増減はあるものの、減少傾向にあり、2014年度は合わせて42.2%となっていた。2015年度は質問文を「学術雑誌をよく読んだ」に変更し、あてはまる割合は30.4%に減少している。2016年度はさらに、質

問文を「専門書や学術雑誌をよく読んだ」に変更し、前期課程と後期課程の状況をそれぞれたずねた。そのあてはまる割合は、前期課程では25.5%（「あてはまる」7.3%、「まああてはまる」18.2%）であるのに対して、後期課程では56.6%（「あてはまる」19.2%、「まああてはまる」37.4%）と、大幅に増加している。

「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合も減少傾向、2016年度の後期課程では約8割があてはまる

議論したり考えたりする友達を得られた



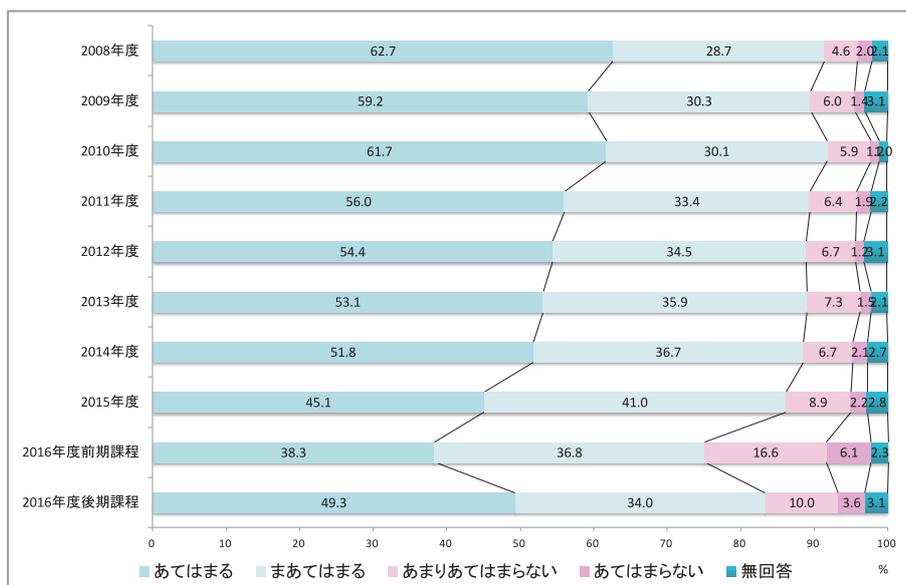
「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」48.4%、「まああてはまる」40.0%で合わせて88.4%であったが、年度ごとに多少の増減はあるものの年々減少傾向にあり、2015年度には81.2%に減少している。

なお、2015年度より、「議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」と質

問文を一部変更している。2016年度では、前期課程のあてはまる割合は66.5%（「あてはまる」26.8%、「まああてはまる」39.7%）で、後期課程のあてはまる割合は79.2%（「あてはまる」39.6%、「まああてはまる」39.6%）となる。

「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合も減少傾向

優れた友人に感心したり感化されたりした

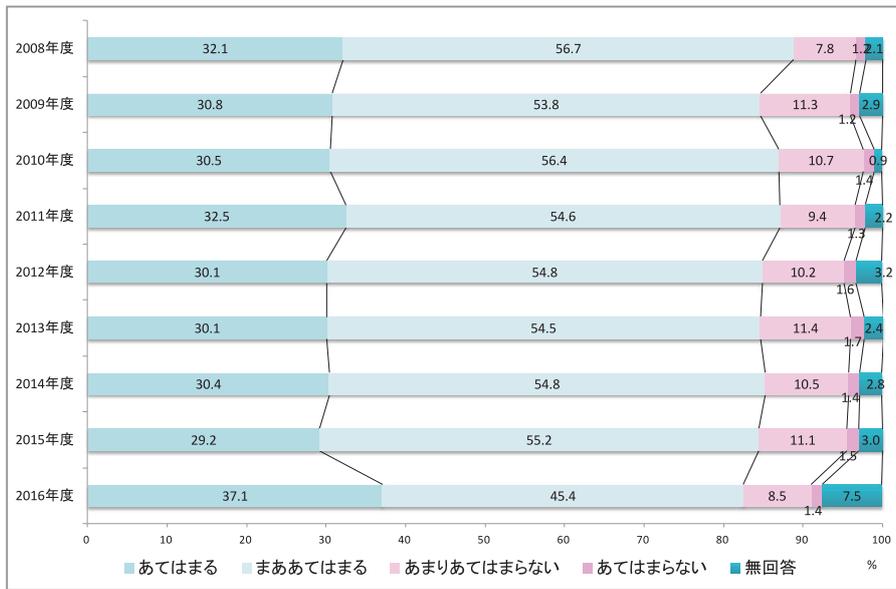


「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」62.7%、「まああてはまる」28.7%で合わせて91.4%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、傾向として年々減少し、2014年度には88.5%であったが、2015年度には86.1%に減少している。とりわけ、「あてはまる」者のみの割合では、

2008年度の62.7%から2015年度の45.1%へと大幅に減少している。また2015年度より、「優れた友人に感化された」と質問文を一部変更している。2016年度のあてはまる者の割合は前期課程では75.1%（「あてはまる」38.3%、「まああてはまる」36.8%）、後期課程では83.3%（「あてはまる」49.3%、「まああてはまる」34.0%）となる。

「自分なりのものの考え方を得られた」者もわずかに減少傾向

Q20 自分なりのものの考え方を得られた

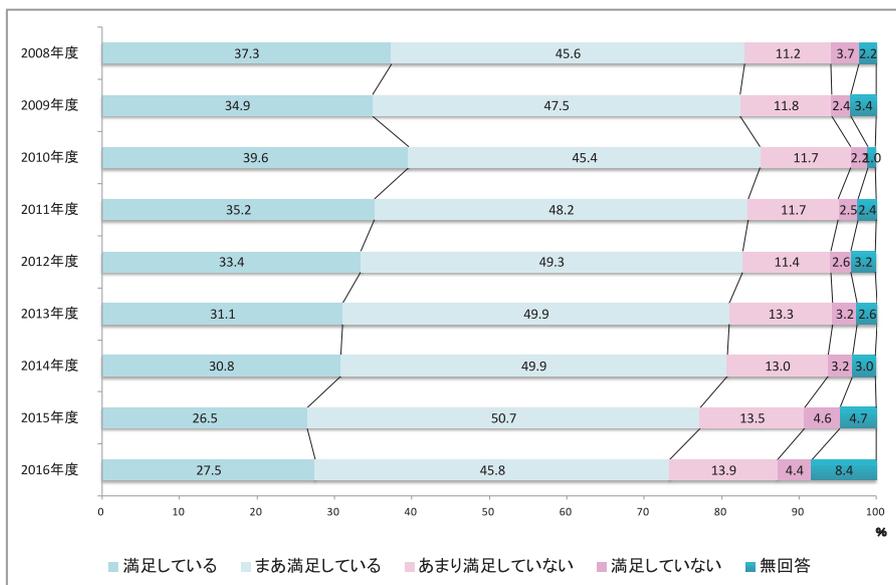


「自分なりのものの考え方を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」32.1%、「まああてはまる」56.7%で合わせて88.8%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、やや減少傾向にあり、2016年度には82.5%（「あてはまる」37.1%、「まああてはまる」45.4%）に減少している。ただし、「あてはまる」は37.1%と7.9%増加している。

図書館などの学習施設の満足度は減少傾向

Q25 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

図書館などの学習施設



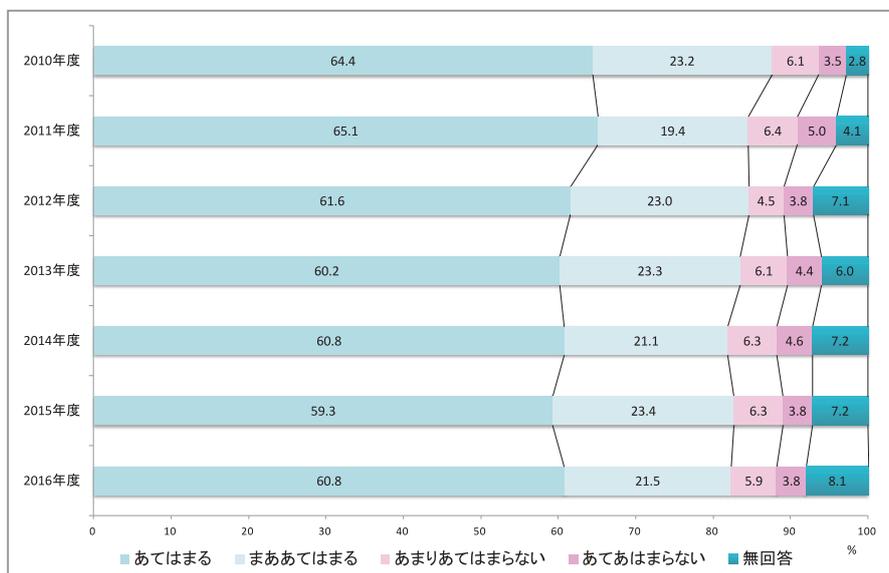
図書館などの学習施設についての満足度は、年々低下する傾向にある。2008年度は「満足している」37.3%と「まあ満足している」45.6%と合わせて82.9%と8割以上が満足していたが、2016年度にはそれぞれ27.5%と45.8%で合わせて73.3%と10%近く低下している。

進学振分けについては小幅な変化

「進学先を希望通りに決めることができた」者はやや減少

Q23 進学振分けや進学先についてお聞きします。

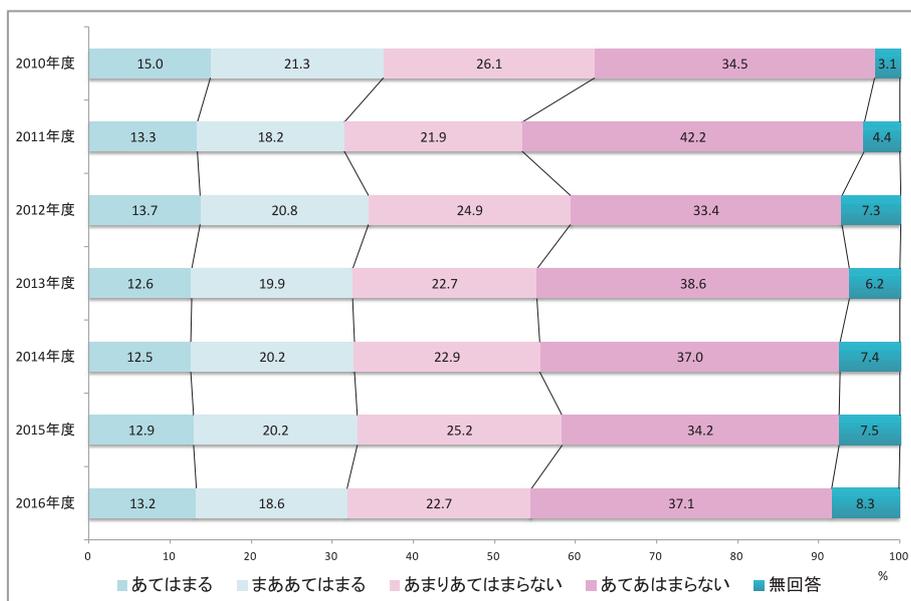
進学先を希望通りに決めることができた



「進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は「あてはまる」64.4%、「まああてはまる」23.2%で合わせて87.6%であったが、わずかであるものの、年々減少傾向にある。2016年度には「あてはまる」60.8%、「まああてはまる」21.5%で合わせて82.3%と減少している。

「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者はわずかに増減

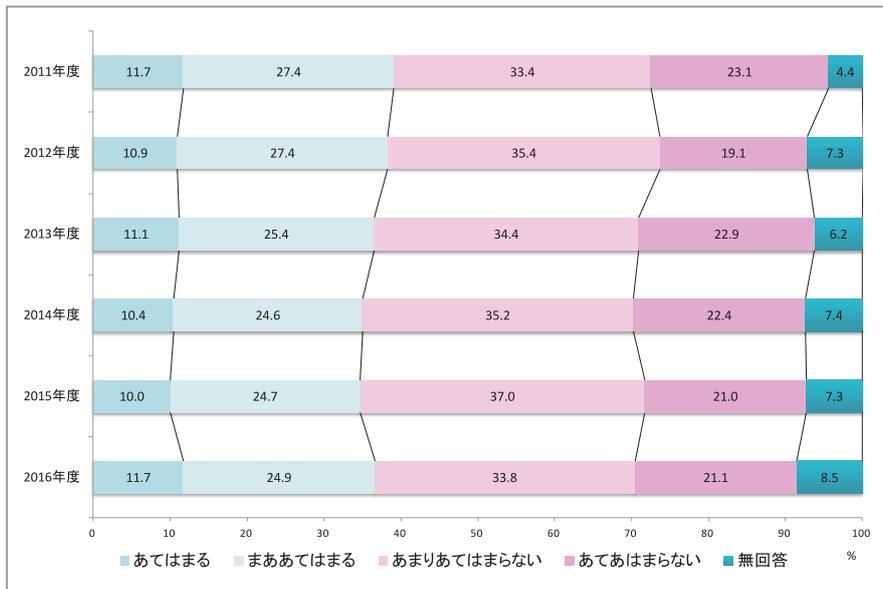
途中で興味が変わって進学希望を考え直した



「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2010年度は「あてはまる」15.0%、「まああてはまる」21.3%で合わせて36.3%であったが、年度ごとに増減があり、2016年度には「あてはまる」13.2%、「まああてはまる」18.6%で合わせて31.8%と、やや減少している。

「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者はやや減少傾向、2016年度ではやや増加

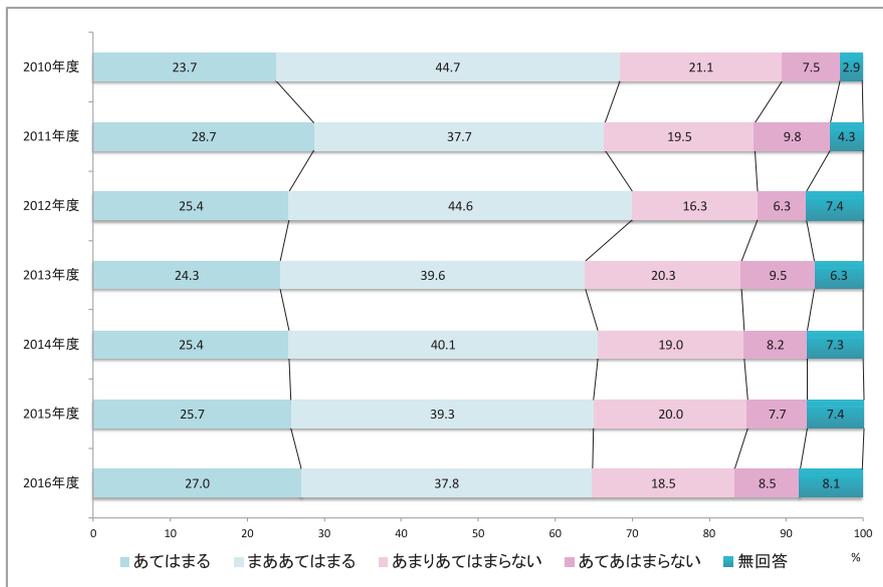
現在の進振り制度は複雑すぎる



「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者は、2011年度は「あてはまる」11.7%、「まああてはまる」27.4%で合わせて39.1%であったが、年々わずかに減少傾向にあったが、2016年度には「あてはまる」11.7%、「まああてはまる」24.9%で合わせて36.6%と、やや増加している。

「進学先はイメージしていた通りだった」者は年度ごとに増減

進学先は進学前にイメージしていた通りだった

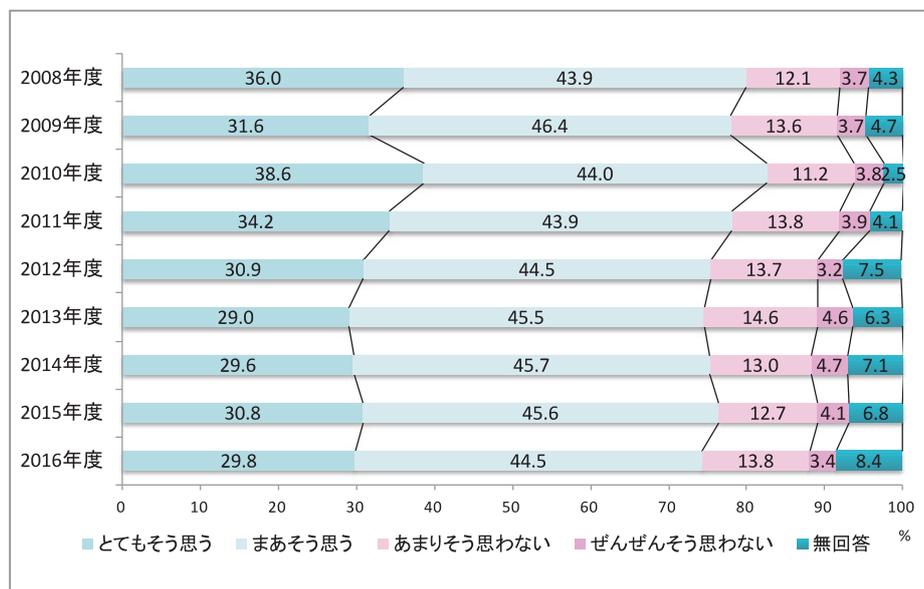


「進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、2010年度は「あてはまる」23.7%、「まああてはまる」44.7%で合わせて68.4%であったが、年度ごとに増減があり、2013年度には「あてはまる」24.3%、「まああてはまる」39.6%で合わせて63.9%とやや減少傾向にあった。2016年度はそれぞれ27.0%と37.8%で、合わせて64.8%となっている。

「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深める」現行方式の支持はやや減少傾向

Q24 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。

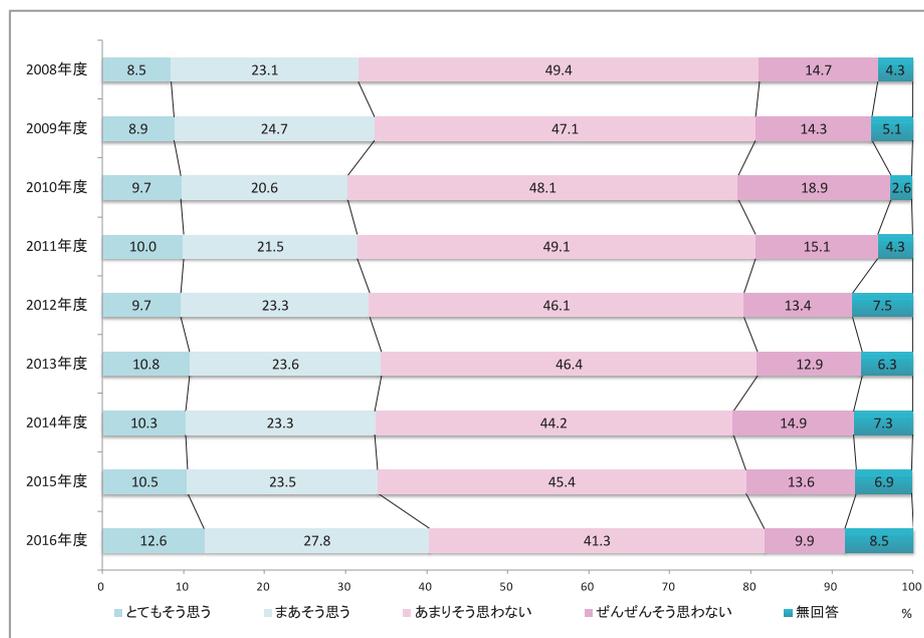
前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい



「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」36.0%、「まあそう思う」43.9%で合わせて79.9%であったが、2010年度の82.6%をピークにやや減少傾向にある。2016年度では「あてはまる」29.8%、「まああてはまる」44.5%で合わせて74.3%に減少している。

「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいく」方式の支持はやや増加傾向

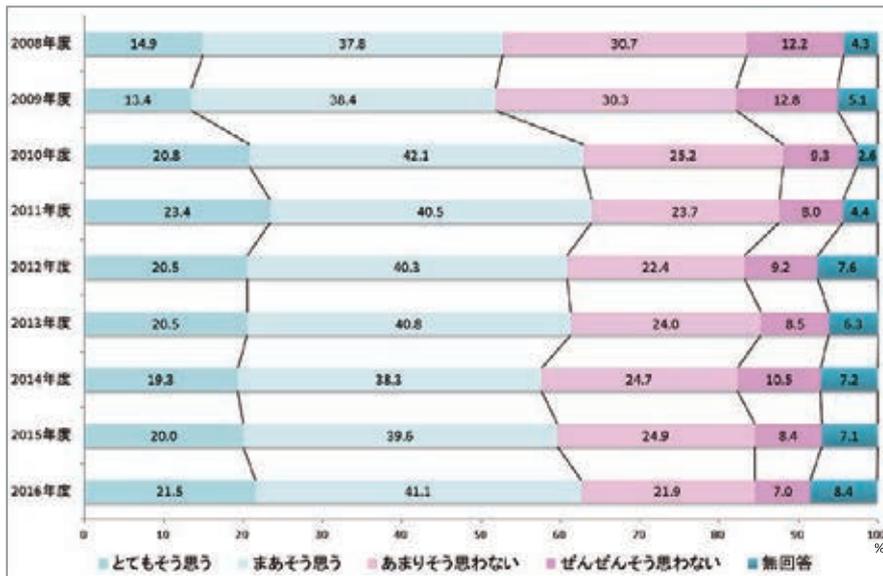
入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい



これに対して、「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」8.5%、「まあそう思う」23.1%で合わせて31.6%であったが、2010年度にやや減少したものの、その後増加傾向にあり、2016年度では、合わせて40.4%（「あてはまる」12.6%、「まああてはまる」27.8%）と2015年度より6.4%増加している。

「後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」はやや増加傾向

後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい



前二者の中間の方式として、「C. 後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」を支持する者は、増減はあるが、ここ3年はやや増加している。とくに、2016年度は、62.6%と2015年度より3%の増加となっている。

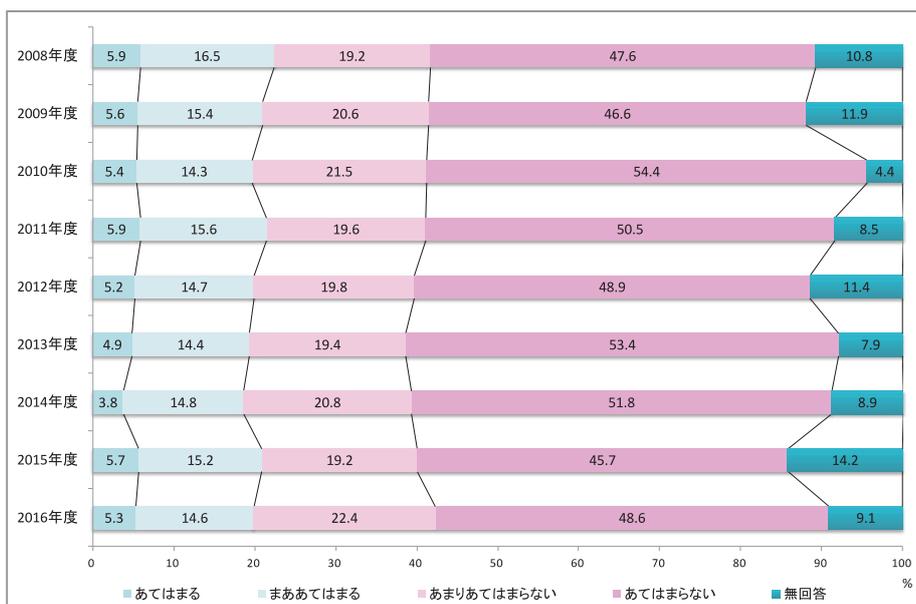
なお、この質問は、2015年度までは「前期課程で専門の基礎を固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学んでいくやり方がよい」となっていた。

卒業後の進路に関して、肯定的な傾向も否定的傾向も見られる

「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者は、年度ごとにわずか増減

Q27 あなたの卒業後の進路と決定プロセスについてお聞きします。

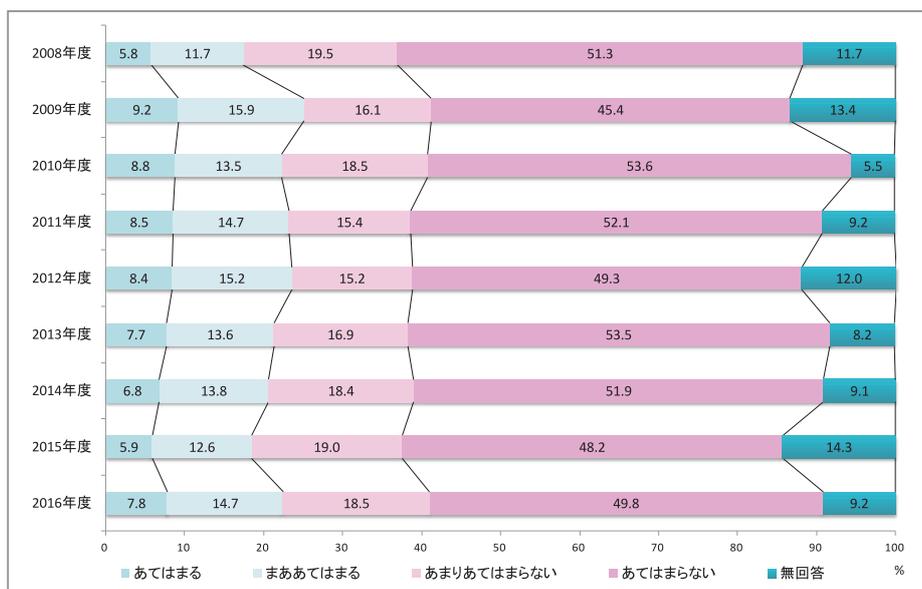
就職活動のために勉強の時間がとれなかった



「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.9%、「まああてはまる」16.5%で合わせて22.4%であったが、やや年毎の増減はあるものの、2016年度には合わせて19.9%となり、2015年度の20.9%と比べ、わずかに減少している。

「厳しい就職活動となった」者はやや減少傾向にあったが、2016年度はやや増加

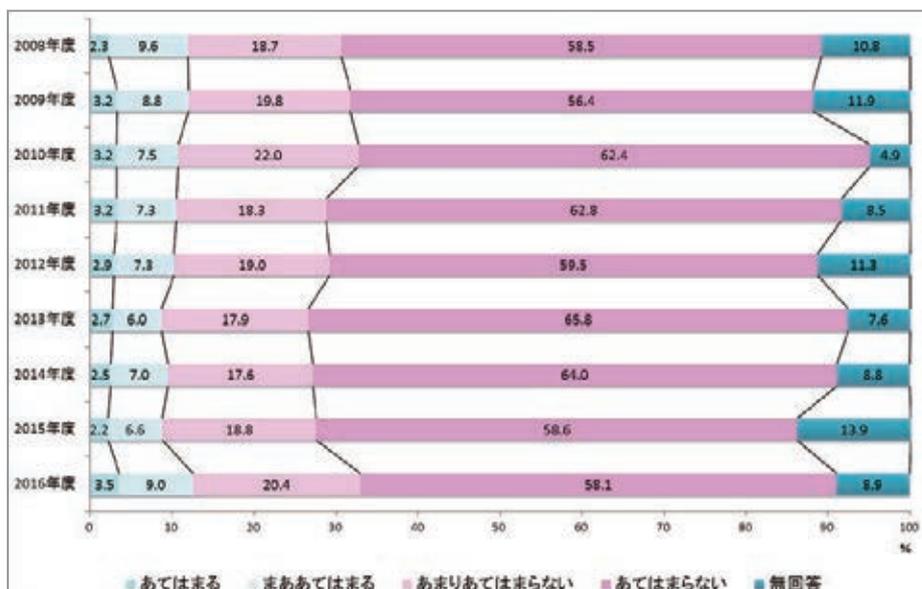
厳しい就職活動となった



「厳しい就職活動となった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.8%、「まああてはまる」11.7%で合わせて17.5%であったものが、2009年度には25.1%と増加している。その後、わずかに増減しているが、減少傾向にあった。しかし、2016年度には22.5%に増加している。

「経済状況を考えて進路を変更した」者は減少傾向にあるが、2016年度は約4%増加

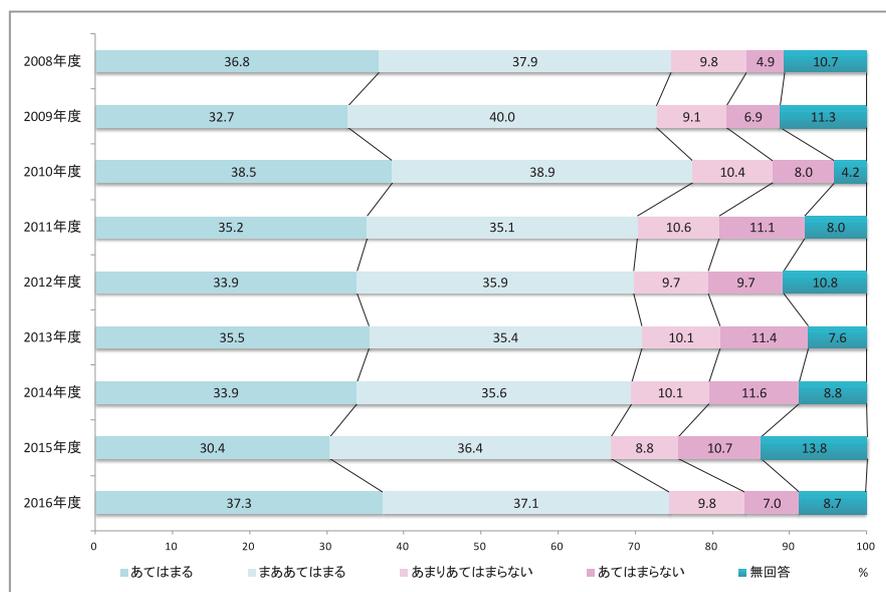
経済状況を考えて進路を変更した



経済状況を考えて進路を変更したものは、やや減少傾向にあったが、2016年度は「あてはまる」3.5%、「まああてはまる」9.0%と合わせて12.5%と2015年度の8.8%から約4%増加している。もともとの割合が低いため、比率的には大幅な増加となっている。

「満足のいく進路決定ができた」者はやや減少傾向にあったものの、2016年度は急増

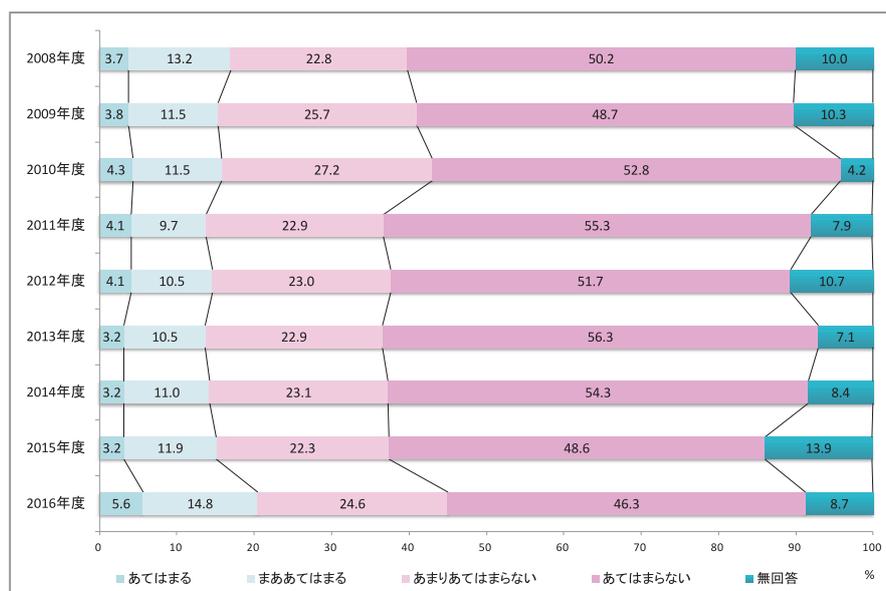
満足のいく進路決定ができた



「満足のいく進路決定ができた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」36.8%、「まああてはまる」37.9%で合わせて74.7%であったが、2010年度の77.4%をピークに減少し、2015年度には66.8%まで減少したが、2016年度では74.4%（「あてはまる」37.3%、「まああてはまる」37.1%）と7.6%増加し2010年度と同じ水準になっている。

「大学の進路相談の機会が役に立った」者はやや減少傾向だったが、2016年度では大幅に増加

大学の進路相談の機会が役に立った

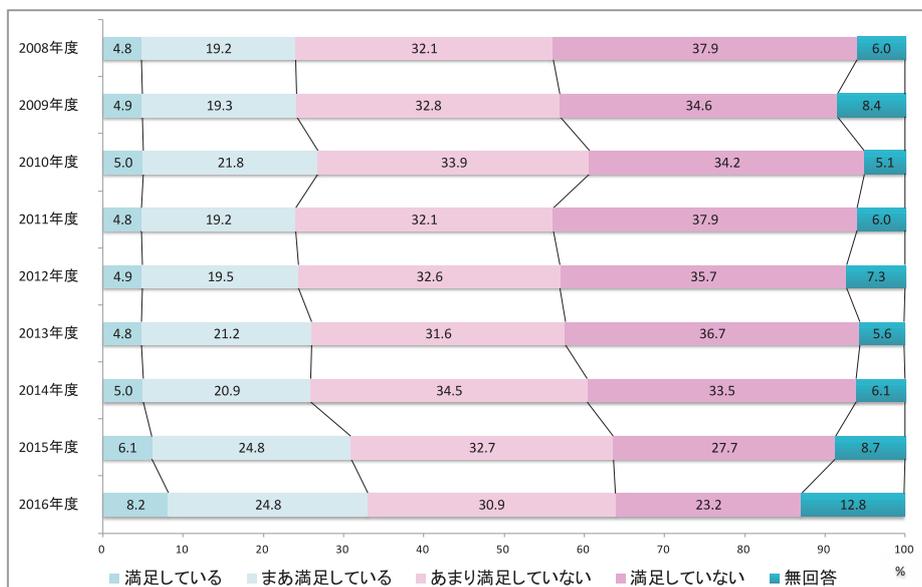


「大学の進路相談の機会が役に立った」者の割合は、2008年度は「あてはまる」3.7%、「まああてはまる」13.2%で合わせて16.9%であった。その後、年度ごとに増減を繰り返すが、減少傾向にあった。2016年度は20.4%（「あてはまる」5.6%、「まああてはまる」14.8%）で、2015年度より5.3%増加している。調査を始めて以来、「大学の進路相談の機会が役に立った」と回答した者の割合は2016年度が最も大きい。

就職指導の満足度は増加傾向、しかし満足している者は3分の1

Q25 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

就職指導



就職指導の満足度は2008年度は「満足している」4.8%、「まあ満足している」19.2%を合わせて24.0%と約4分の1が満足していたにすぎない。その後増加傾向にあり、2016年度には、それぞれ8.2%と24.8%で合わせて33.0%と3分の1に増加している。

大学教育の達成度調査(2008年度-2016年度)回収率

2017年6月1日現在

	2008年度			2009年度			2010年度			2011年度			2012年度			2013年度			2014年度			2015年度			2016年度		
	卒業 者数	回収 枚数	回収 率	卒業 生数	回収 枚数	回収 率	卒業 生数	回収 枚数	回収 率	卒業 生数	回収 枚数	回収 率															
法 学 部	433	152	35.1	409	156	38.1	398	32	8.0	425	407	95.8	407	395	97.1	427	387	90.6	399	389	97.5	392	365	93.1	395	367	92.9
医 学 部	133	23	17.3	129	19	14.7	109	20	18.3	121	18	14.9	124	112	90.3	124	121	97.6	126	113	89.7	131	124	94.7	136	121	89.0
工 学 部	907	93	10.3	925	437	47.2	943	681	72.2	978	631	64.5	950	630	66.3	967	669	69.2	974	610	62.6	958	639	66.7	994	658	66.2
文 学 部	336	42	12.5	291	263	90.4	370	265	71.6	352	272	77.3	360	303	84.2	361	294	81.4	372	318	85.5	311	273	87.8	338	279	82.5
理 学 部	305	225	73.8	277	202	72.9	293	228	77.8	318	240	75.5	282	239	84.8	282	203	72.0	301	228	75.7	292	206	70.5	314	243	77.4
農 学 部	279	258	92.5	272	247	90.8	267	245	91.8	279	257	92.1	266	233	87.6	267	234	87.6	275	241	87.6	269	243	90.3	255	219	85.9
経済学部	349	275	78.8	359	330	91.9	358	349	97.5	333	304	91.3	329	287	87.2	334	292	87.4	365	284	77.8	325	250	76.9	352	201	57.1
教養学部 (後期課程)	165	35	21.2	141	25	17.7	184	21	11.4	154	144	93.5	186	148	79.6	186	158	84.9	175	156	89.1	171	143	83.6	184	137	74.5
教育学部	96	40	41.7	102	29	28.4	101	20	19.8	110	105	95.5	99	96	97.0	99	99	100.0	90	75	83.3	99	98	99.0	90	80	88.9
薬 学 部	90	84	93.3	78	73	93.6	78	75	96.2	91	90	98.9	86	81	94.2	86	80	93.0	82	80	97.6	89	86	96.6	82	65	79.3
合 計	3093	1227	39.7	2983	1781	59.7	3101	1936	62.4	3161	2468	78.1	3089	2524	81.7	3133	2537	81.0	3159	2494	78.9	3037	2427	79.9	3140	2370	75.5



この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、大学総合教育研究センターを通じて行ってください。

東京大学広報室

no. 1505 2018年1月19日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学総合教育研究センター
大学改革基礎調査部門
e-mail : enq@he.u-tokyo.ac.jp